
或る政略結婚の実体

伊達 ししい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る政略結婚の実体

【Zコード】

Z0441U

【作者名】

伊達 しげ

【あらすじ】

初投稿です。宜しくお願ひします。

顔もあわせたことのない王子と王女の結婚で生まれるどたばた系ラブコメディ。二人がお互いをどう認めるかのせめぎ合いを書いていければと思っております。

prologue : 1 side・姫（前書き）

IJのお話は最初のNORN（寸止め）48とこの「仮のタイトル」をつけ
ておりましたが。

あまりにもなタイトルなので変えてみました。
内容は仮タイトルまんまのコメティもどきです。
少しでも楽しいと思つていただければ幸いです。

はじめまして伊達^{だて}ししいと申します。初投稿作品になりますがよろしくお願いします。

一応R15にさせていただきました。

王家に生まれたからには果たさねばいけない義務があることはわかつていた。

同じ年の乳母のリリナの娘アンナとはともに育つたが、私はいつもイイものを食べイイものを着せられている。つまりそれが身分の差であり、その差は唯この身が王家に生まれついたという理由でしか生まれてこないことも。私は4歳くらいのころに気がついてしまったのだ。

それでもまだ私は気楽である、大兄さまは長子として生まれついてきたがゆえにこの国を背負つて立たなければならない。

中兄さまは大兄さまの政務のサポートをこなし、何かあつた時のスペアとして大兄さまにお世継ぎが生まれるんでも毒にも薬にもならない様に目立たず存在している。

小兄さまは軍事に適性を見出されたようで日夜鍛練に励まれておられ、軍のTOPとして立てるようになり、努力されておられるけれど、スペアは2つもいらないので、もうすぐ臣下に下らなくてはならない。

実の兄を兄とも呼べなくなり、そのうえ兄に膝をつかなくてはならないのだ。

お姉さまはこの間、東の隣国へ嫁いで行かれた。

その後2～3カ月に一度便りは送られてくるが、姉さまのいつもの快活な文章ではないところを見ると、妹姫に出す手紙でさえも自由にならない生活なのだろう。

お手紙通りお元気でいらっしゃることを願うしかない。

私はそんな王家の5番目に姫として生まれついたのだ、今まできれいなドレスを着て贅沢な暮らしをおくり、何不自由なく暮らせたのも何かの時に役に立つから、以外の理由は思いつかない。

そして私の何かの時は13歳のときにやつてきた。

お庭で王妃であるお母様とお茶をしていろときだった。お父様が来て、こういったのだ。

「姫や、お前の興し入れ先が決まったよ」

私は一瞬目を見開いたがまるで天氣の話でもしていろかのようひこう聞き返した。

「まあ嬉しい、陛下。それで私の旦那様はどちらの国の方ですか？」

その日から2年。15になつた私は不安を抱えながら嫁ぐ国に向かう馬車に揺られている。

「どんな方なのかしら？」

私は晴れた空に向かつてそつぶやいた。

この馬車に同乗するのは我が国の侍女であるアンナとかの國のお迎えである、大臣のクラクス様。

車輪の音にかき消えるように囁くよつとしてつぶやいたのだから、この質問に対する答えなど望んでいなかつた。

私が知っていることと言えば、3つだけ。

隣の軍事大国ダンジールの世継ぎ王子、フィジヨン様と言つてお名前。御年が私より5歳年上の20歳にならるといふこと。そして、私が2番目の正妃であるといふこと。

前に王妃様でいらした方は、出産で命を亡くされたあげく、お生まれになつた方も姫様であまり体がお丈夫でないとか。まあ、それでもなければ、なんの利用価値もない隣の小国の末姫なんかもういませんよね。

別に隣国まで鳴り響く美姫つてわけでもないですし。

私の役割その一は、その姫様のお相手と養育。

その二は言わずと知れた、お世継ぎ作りだけどねー。

うちの父様は愛妾を持たず、母様だけでも子供が5人。子供が出来やすい家系だと思われて、そこが望まれた最大の理由といふことらしい。

ま、いいけどねー。

フィジヨンさまにはただいま絶賛お付き合い中の愛妾様がいらっしゃるので、

理由その一になつてます。

理由その二は、まあ政治的なこと。

私の国は小さいけれど海に面しております。

タンジールから流れ込む大河、トイサ河河口の港を所有しております。

その上国土はそれなりに温かく、作物も割とこれまで、輸出もいたしております。

また海のないタンジールへの最大の輸出品は塩。

タンジールがウチに攻め込まないのはその国境が高い山脈がそびえ立っており、

唯一ひらけたところは川沿いの湿地帯で馬での行軍もままならないから、ですし。

それだけの労力をかけて支配するだけの理由もないことになりますが、同盟国扱いなのだ。

タンジールからの保護並びに同盟関係の強化のあかしとして興し入れ、ということになります。

また、花嫁行列のあとに塩を担いだ馬が続いていることで想像してください。

まあそんな感じで、タンジール側から「しお姫」なんて言われてることも知つておつましてよ。

まあ、王族同士の結婚なんてこんなものです。

できればフィジジョンさまがあまりブサイクでなく、変質的な性的趣味のないかたでありますよつ。

そう晴れた空に願いをかけてみる。

昨日国境を越えて、王都まであと3日。快適である馳車でもやつぱりちょっと腰が痛い。

侍女やお付きの騎士たちはもつと痛いんだろうなあ。
「ごめんね、付き合わせて。

今日の宿場には温泉があるらしいよ。

ゆっくりしてね。一回熱でも出そうかな。
そうすればもう一泊位休めるよね。

熱ぐらう自由にさせなくて、王族なんて務まりませんのよ。

ここに臣下を休ませる理由を作るのも姫としての務めですかよね?

だってわざわざ行程に温泉保養地が入っているのは、そういうこと、
ですか？

お相手の王子様は次に出でまいります。
楽しんでいただけるようがんばります。

prologue side・H子（前書き）

まだ出会つ前の二人の認識です。
二人の立ち位置なんかもこれでわかるかな?
と思っています。

「王子。国境のロレアニアからアーシュラーナ姫が国境を越えた、との報告が入っております」

侍従のその言葉に、一瞬手が止まつたが、うむ、とうなずくとすぐに執務を再会した。

姫ねえ。

目の前の書類の整理に没頭しながらその存在が心の片隅にひつかかっていた。

二年前に出産ともに死んでしまった正妃。

それ以来決まつた妃ももたず、戯れに女を呼びつける。

そんな生活に慣れてしまつたせいか、どうも気に入らない。だからといって国境を越えた、という姫には何の気持ちも浮かんでもこない。

この国は大国と持ち上げられてはいるが、軍事力を基礎とするこの国においては、弱みをみせることが政権転覆のきっかけにもなりかねない。

先の妃は有力な貴族の娘であつたからもらつたようなもので、なんの気持ちもなかつた。

適当に相手をしていたのだが、すぐに飽きた。

足が遠のいてから懷妊の知らせを受け取つた時は何かの間違いだと思つた。

その間違いは、すぐに明らかになつた。

妃の侍女の一人が実は女装して入り込んだ男で、その男とよろしくやつてできた子、という話を少々脅しつけたら白状した。

そのとき、父親である騎士公爵と話をつけ、女子立つた場合は姫と

して育てる、男子として生まれた場合は公式には死産として赤子は臣下に下げ渡す。とした。

そして今後一切妃の部屋には渡らないとも申し伝えた。

全く、どんな育て方をしたのやう。

妃は出産で死に、生まれたのは娘でとても可愛い。

自分の娘ではないとは知つても腕に抱いた瞬間に

『これは俺の娘だ』と無条件に思つてしまつたのだから不思議だと自分でも思う。

ありがたいことに死んだ妃に似た感じに育つてきている。

浮氣相手の侍女もどきの男は幽閉の上いつの間にか死んでいた。それですこし肩の荷が降りたとおもつたら、今度は王が倒れた。幸い重い病気ではなかつたが、信頼篤い騎士公爵の娘の浮気がショックで病気の引き金になつたのかもしれない。

政務はもっぱら王子である自分が行うことになつた。ありがたいことに自分は一人っ子であり、有力な後継者になりそうな血縁もおらず、無事に政務軍事の事実上の権力はこぢらに委譲された状態である。

父王の具合がよくないとなると、次期王妃の座が空白となる。元々社交が好きでない母は父の看病を名目に社交には顔を出さなくなつた。そのため、王妃の座をねらつ有名無名の貴族たちがこぞつて娘を紹介しに訪れるようになつた。そして火花の散らし合いのあげく、膠着状態に陥つたのだった。

誰を選んでもバランスが崩れる。一ちらとて、血氣盛んな若者であるから、それなりの欲望は持ち合わせており、手つとり早く処理する相手は欲しい。そんなときに手をつけたのが今の女。国一番の歌姫だった。

その女も結局権力に目がくらんで、最近なにかとつるさくなつてい

つた。

もう女はこりごりだ、と思わせるほど一触即発の緊張状態であった。

そんなとき海の国といちらでは称されるアルシェス王国の姫からの縁談が持ち込まれたのだった。

たぶん中立派のだれかがアルシェスに妥協案としての輿入れを要請したのかもしれない。

お相手の姫は末の姫でその当時十三歳。まだいささか幼いので、二年ほど国元で育てた後、そちらへの興し入れでいかが。と締めくくられてきた。

こちらの膠着状態を見透かしたかのよう渡りに船の他国の姫君の輿入れの申し入れである。

相手は小国とはいえ、水運ならびに貿易の相手国であり、食物の輸入先でもある。特に塩はほぼすべてをアルシェスに頼っているようなものである。決して粗略に扱われるべきでない国の姫だ。

またアルシェスは貿易で成り立っている国だけに政情不安には敏感である。戦が起これば荷物も滞る。隣の大国の内戦など死活問題になりかねない。荷物の遅延や損傷・盗難など国家レベルで貿易に力を入れているあの国では我が国の混乱は避けた買つたのだろう。隣国が女で政情不安定になるくらいならば、いつそ娘を嫁がせるか、と言う話になつたのかもしれない。

そんな姫をもし富中での権力争いなどに巻き込みでもしたら、すぐに塩の輸入はなくなってしまうかもしない。

つまり、これは利害の一一致による政略結婚以外の何者でもないのである。

大事にしつつ、子を成せ、といつのがこの結婚の大命題ということだろう。

「十五の小娘か。」

一年も婚約期間があつたにも関わらず、お互に肖像画の交換も成されなかつたので顔も知らない。

知つているのは十五といつ年齢と、名前がアーショーラーナといつことだけである。

「ま、くればわかることだ。」

考へても始まらないことは考へない。

今は空っぽで妙に居心地のよい後面を思つ。

十日ほど前までは女優が居座つていてなにかと騒がしく、そのあとは家具の入れ替えだ、荷物の整理だと何かと騒がしかつたが、今は不思議と静かでよく眠れる。

この安眠もその姫が来るまでのせやかな休息なんだらう。

できれば、あんまりバカじやなくしてそこそこの容姿であればいいな。

まだ見ぬアーショーラーナ姫への思いはそんなものであつた。

1・1（前書き）

本編スタートです。出でて編とでも申しまじょうか。

温泉で仮病を発症して微熱をひねくり出した私は、当初の予定よりも3日長くその温泉地に逗留した。

元々天気も上々予定より早く進んでいると聞いていたし、時間調整もかねていたのかな。

そのおかげか、付いてきた護衛も侍従も侍女たちも心なしか血色がいい。

馬も元気を取り戻し、心なしか馬車も綺麗だ。

それはそれで居心地いいし。

結果オーライでよかつたのかな？

私もすっかり疲れがとれたし。

もし王子様が私のこと好きになれないと思つなら病氣療養を理由にあの温泉地に別荘建ててもらおつ。

そこで”ビバ！温泉引きこもりライフ！”を送りつ。

お気に入りの美人女優をはべらしてらつしゃるといつ噂だし、あつという間に私なんか飽きるんだろうなあ。

そしたら、”ビバ！温泉引きこもりライフ！”に突入できるからいいかも。

そんな想像をすることができるほど、氣力も回復してきた。明日には王都につくらじこし、どんな人なのかな。王子様。

馬車の窓から見えるこのタンジールの景色はウチとは違う。ウチん所は窓から見えるのはほぼ農地である。

海沿いにある王城の近くは塩田がきらめいていたし、内陸に向かえば野菜や麦の畑があるでじゅうたんのように広がってる。

トイサ河から引かれた運河からの灌漑用水がきらめいて、本当に綺麗な国だと思って通り抜けてきた。

私の行列に気がつくと、手を振つて見送つてくれるような人懷つこ
い我が民。

その中を馬車は進んできた。

山脈を馬車で越えられないのはわかつていたので、途中からトイサ
河を船で遡上。

一番近いタンジールの港は板でできた小さな桟橋があるだけの簡素
なものだった。

タンジールは質実剛健、軍事の国である。

桟橋も頑丈に作つて有事の際は敵の利便になることを恐れていつで
も壊せるように簡素にできている。

と私を迎えたクラクス 大臣が説明してくれた。

そして船から降りた私を迎えてくれたのは、見渡す限り広がる牧草
地と馬だった。

その一面に広がつた光景に思わず「すごい」とつぶやいてしまつた。
余りにも違う。

それが第一印象だった。

感動的な牧草地帯も何日も同じような光景が広がつていればさすが
に飽きる。

河沿いなど気候の温暖な地域にはそれなりに農地もあるらしいが、
この国では農耕より放牧に地質もあつてゐるらしい。

ウチより寒いらしいけど、イモも無理なのかなあ？

もし王子様が農産に興味あるならその辺も提案してみよう。
行き先に目をやると高い塔が見えてきた。

あれがタンジール王都ノクロア、別名鋼鉄の都なんだ。
そこには未来の旦那様がいらっしゃるのね。

馬の足取りが心なしか軽くなってきた。

馬車が石作りのアーチをくぐつていく。

旗がなびく大通りを私を乗せた馬車が通り過ぎていく。
町の人々は、私が誰でなんのためにここまで来たか知つてもなおこ
ちらを見ない。

車窓から顔を出して手を振るうとしたら、クラクス 大臣に止めら
れた。

「王子と対面するまで、臣下に顔を見せてはなりません。そういう
しきたりです。」

そう言つて、隣に控えていた侍女のアンナにベールを出させた。

「申し訳ありません、失念しております」

そういうとアンナに手伝つてもらいながらベールを身に付けた。

ベールを神経質に直しながら座つていると、馬車の速度が落ちて、
止まつた。

「姫様。到着したようです」

「わかつたわ、アンナ。行くわよ」

クラクス 大臣に手をひかれ、私は幾重にも重なつたベールの下で
不安と鬪つていた。

ひとり大きな扉の前で一度止まつた。

タンジールの言葉で私の名が呼ばれた後、音もなく大きな扉が開く。
そしてベールでぼやけた視線の先に私の未来の夫、フィジョン様が
座つていた。

「姫、遠路はるばる我が国までようこや。これほどまことに可愛ひしく美しい姫を我が妃に迎えることができうれしく思ひ」
そういうと壇上から降りてきてクラクス 大臣から私の手を受け取
り、壇上へいざなつてくれた。

私はその前で膝をおる。

「王子、麗しい御尊顔こうしてお目もじできうれしく存じます、
幾久しくよろしくお願いいたします」
見えもしない癖にこう挨拶する。

「お一人にツドリル神の御加護があらん」とを
クラクス 大臣がそう祝いの言葉を述べれば、この謁見は終わる。
そう段取りを聞かされていた。

「姫、お疲れだろう、部屋に下がつて疲れをいやされるとよい。
後はどうかがつて旅の様子など伺いたく思うがいかがか?」
そう王子から声がかかった。

「湯の後でよろしければ」
私は率直に答えていた。

広間はざわめきに包まれた。

私は何か失敗したらしい。

1 - 1 (後書き)

まだお互いの顔もみてません。

SNDM(寸止め)の本領發揮です!

1 - 2 (前書き)

まだお互いの顔もみてません。

どうしてこんなに皆様、動搖なさっているのかしら？

私は少し戸惑いながらも下げる頭を上げずにいた。

だって、まだ上げてよいつて言われてないしね。

足は大丈夫だけど、ベールをのせた頭が重い。

血が逆流しそう。

「姫も冗談がお上手だ」

そういうつて私を助けてくれたのは婚約相手の王子ではなく一緒に来たクラクスー大臣だった。

「旅の汚れを落としてからお会いしたい、といつ意味で『ござ』いますよね」

豪快に笑いながら成された言葉に、私の先ほどの不用意な発言がこちらでは問題発言であることに気がつかされた。

それをクラクスーはフォローしてくれたのだ。

「ええ、そのつもりで申し上げたのですが、何か冗談にでも聞こえましたでしょうか？まだこちらの言葉がうまく話せませんし、何か間違えてしましましたか？」

私は無邪気に見えるように姿勢を戻すとおずおずと発言した。

私はまだ十五歳なのだ、そのような隠語などなにも知りません、と言つかるように首を傾げてみた。

「姫の言葉はとてもお上手ですよ。ただ変に深読みした大人たちがいた、と言つことです」

そういうと、王子も私の擁護に回る。

「よかったです。失敗して受け入れられないようなら塙とともにまた国に帰つてきなさいと、父に言われて参りましたから、また来た道を逆戻りかとおもいましたわ。」

こちらの国、だつて私を迎へねばならぬ問題があるので、このような

子供の言葉一つを揚げ足をとるようなことをしていれば、まだ馬の背から下さされていない塩を持ち帰らてしまふかも知れない、と思わせることができるればいいのだ。所詮私はしお姫なのだから。

「姫、これから幾久しくよろしく頼む」

「ええ、王子様こちらこそふつつかではありますがよろしくお導きください」「うう」

この言葉が交わされた時点で婚約が成り立つ。

「婚約の証として、我が腕輪を贈る」

そういうて手に飾られた真新しい腕輪がはずされて私の左手にはめられた。

今まで王子の腕にぴったりに見えたその腕輪は私の腕に巻き付いたとたんそのサイズを変えて、私にぴったりになった。

少し驚いて王子を見上げると、

「するべきものに併せて変化するのだ」と小声で説明していくださった。

「私がらは、」といつて胸元にぶら下げたチーンを引き上げた。

「こちらの指輪を。お手を拝借してかまいませんか？」

そうこうして王子の手を取ると、こちらの王家の紋章を彫り込ませた一見黒にも見えるほど深い紺の石をはめたものを人差し指にはめた。

「なんとすばらしい。ゼオールの指輪だ。ありがたく頂戴しよう」

そういうて臣下に見せつけるように指を掲げて見せた。

事前に聞いていたので右手にぴったりとその指輪はおさまった。

ああ、よかつた。これがきつくて入らない！

とかだと困っちゃうのよね。

指輪サイズは私の親指でもぶかぶかだったんだよなあ。

手をみた感じだと、しっかりと剣の稽古もしてゐる堅い手だった。
甘やかされたほんほん王子じゃなくてよかつた。

そんなことを思いながら、王家同志の結婚でよくみられる、『ウチつてすごいんだぜ?』的な贈り物の交換をするませる、つてこと自体が表面上の婚約の儀だし。それが終わるとよつやく私は退出を許されて休むことができる部屋に案内された。

やれやれ。

結局ベールが厚すぎてあんまり王子様の顔わからなかつたわー。髪の毛が金色なのはわかつたけど。

謁見の間で言つたよつてゆつくりお湯に浸かつて寝たい。
てか寝かせる。

着替えをすませた後、晚餐なんてどれだけこき使つのよ。

まあ、晚餐の席では顔も見られるだらうし。
向こうが私にがっかりしなければいいけど。

可愛らしかったが清楚とかは皆言つてくれるけど、だれも綺麗なんて言つてくれないまさに平凡な私だからなあ。

あんまり美形な王子様だと困るなあ。

並んだときのバランスが悪くなるし。

そつこえは結構背高かつたな。

ヒール高くしないとダメかな?

足すつじぐ疲れるんだけど。

これも王女のつとめ、じやなかつた妃のつとめですもの、
足の疲れなど外には悟らせずにがんばつて見せましょ。

私はそんなことを考えながら「ルセットを締められていた。

あー苦しい。

疲れてるんだからお願い。

もう少し手加減して、アンナ。

1 - 2 (後書き)

パートだけの王子様。
これもSNDMかと。

1・3（前書き）

みづやくお姫この顔をあわせないと
王子様の外見やいかに！

いよいよ王子様の麗しい御尊顔と御対面だわね。

先ほどの初対面では失敗してしまったみたいだし、今度はおとなしくお姫様をしなくちゃね。

あまり「裏のある会話なんか出来ません~。」なんて振りしてるとバカのレッテルが貼られちやう。

それは国元のお父様お母様お兄様に申し訳が立ちませんもの。ワタクシはこう見えても、王女なんですから。

その辺のウイットの効いた会話も出来なくては、恥ですわ。

「姫様。 いたいた腕環に合わせて、今日は淡い黄色のドレスにいたしましょう。」

アンナがそう言つて荷ほどきしたばかりのドレス達から、春の靈のよつな黄色のドレスを出してきた。

「やつね、きっとお気に入りの女優様は悩殺ドレスでしょ? から、私は清楚や初々しさを前面に押し出していくしかないでしょ? どうせ色氣皆無のお子様ですし。」

そう言って年よりもむろに幼く見えるよつなふわふわドレスに手を通して通した。

まだ正式に婚儀前なので、使用人も侍女も国元から連れて着た者たちが世話をしてくれている。

婚約期間のうちにこちらの国のしかるべき身分の方に侍女となつていただけるのだろう。

それまでは気楽な会話をもじりもじり楽しめる。

ま、壁の裏には様子をうかがっているモノの気配もしますけど。
それはまあ、お約束つてもんで氣にもしません。

だつて王子様に愛人サマがいらっしゃるのは周知の事実ですし。
それを承知で私もこの国にきましたし。

まだ私は15の小娘ですし。

発育もこの国の方に比べればわ・・つわるい・・し。
どうせ胸小さいし・・・。

まだ15だもん。母様位は大きくなる・・は・・ず・・だもん！
くそー。王子様の女の好みが巨乳なのは知ってるけど、まだ育たないものは仕方ないじゃないか。

いたいた腕環は、銀色。そこにはめ込まれたのは金色のステライト。

金のステライトは身につけている者の魔力に反応して輝く石だからね。

こいつのチカラを見極めたいって思惑もあるんだらうね。
ほどほどに光るようにこちらの魔力も調節しておいで。

さて、愛しの未来の旦那様と楽しくご飯を食べにいきますか。
少しは休みたいけれど、謁見から晚餐までの身支度に拘えられた時間は休憩時間はとれないほどみじかいのよね。

やつぱり、大国とはいえ、武で鳴らした国はそういう時に時間を取り込まれてしまうもの。

そういう細かい作法も早く身につけなくちゃね。

やれやれ、國を背負つて嫁に来るこの身は、上げ足とられ、批判の眼にさらされる覚悟で臨まなくちやあつといつ間に宮廷の暗部に取り込まれてしまつもの。

そんなことも教えずに他国に嫁にやる国があるもんなら見てみたいわ。

それでも、ちらりとこちらの方が文化レベルは上なのよ。
という余裕も厭味にならない程度漂わせる。
なんて綱渡りもしていますが。

晩餐会の行われる大広間までゆつくりとしづしづと進む。
今私の手を引いてくださっているのは、クラクスー大臣。
すっかり私の保護者みたいになつてしまつて、なんだか申し訳ない。
本来ならウチの国の政治家も同行してなくてはならないんですが。
同行したのはこちらの宫廷に上がる資格のない、騎士隊長だから。
大広間まで私をエスコートできないんだよねえ。

ウチの大臣に手をひかれるより、こちらの有力者に手をひかれたほうが、
小国の姫ときつい目を向けてくるお嬢様方への牽制にもなりますし
ね。

しずしずと進む長い廊下には、ガラス窓と鏡が張られている。
すっかり日の暮れた廊下にこれでもか！と並んでいるるつそくの光
を最大限に明るく見せる効果を狙つてのものだ。

夜だとしても薄暗い晩餐会なんてありえませんもの。王宮で。

その分火事が怖いが、その始末もまた王宮のプライドつてものです。

るつそくの炎に黄色のドレスにつけられた宝石がきらきらと輝く。
こちらではあまり紡績が発達していないので、フワフワのシフォンは
珍しいのだ。

このシフォン生地も実は他国には言えないルートで出来上がったい
わくつきの生地だし。

技術と文化を見せつける一品となつております。

私のドレスはそのシフォンをこれでもかー！と重ねてる。

そのシフォンに宝石を縫い付けているのでふわふわのきらきら。

ちょっと、いい気分になるドレスに仕上がっている。

私が通り過ぎる廊下の端にはドレスに見とれるしきりの御令嬢たちがいるし。

顔は残念な平凡だけど、ドレスは気合入ってましてよー！

まだ誰にも紹介されていないので、眼の端に入る御令嬢たちは私にとっていないも同然。

王子様に紹介された時に初めて意味を持つ存在になる。

私の今の扱いは、賓客であり、王子の婚約者（非公式）ですから。向こうも意地悪することはできない。

この扱いが終わるのはこの晩餐会。

王子が私の手を取つて紹介して周り終わつたあとになる。

その短い間に私は、私の立ち位置を見極めなくてはならないのだ。

色っぽいねーちゃんたちの隠れ蓑として過ぐさなくてはならないのか。
きちんと未来の王妃として扱われることができるのか。

アンナが言うには、今後宮には私しかいないそうだけれど、婚儀前にさすがに女を引っ張りこむのはと遠慮していることも考えられるしね。少し様子を見なくては。

私はクラクス 大臣に手を引かれて広間の前まできた。

ここで初めて王子様に引き渡される。

すっと隣に立つた王子様。ちらりと横目でみるとヒールを履いた私

の眼が王子様の首。

うん。いいバランスじゃない？　このホールにしてよかつた。

そしてゆっくりと視線をあげる。

どうか平均程度でありますよつこ。

隣に並ぶのがつらこよつの美形でも、もつ一度見ると嫌なほどの
ブサイクでもあつませんように。

少し日に焼けた顔。

椿の葉のような暗めの縁の眼。

そして先ほどもきがついた、わいわいの金の髪。

こりやつて色の配置はいいのこ。

残念なことにおめめが。

捨てられた子犬チックに垂れ目さん・・・。

せめて切れ長だつたら超イケメンだつたのになあ。

釣り目さんだとこわくて近寄れない感じになつちやつよなあ。

それ考えると、このくらいの垂れ目が愛嬌あつて可愛いかも。

これだけ鍛えられたムキムキマッチョじゃなかつたらな！

武を尊ぶ国柄でなよなよ優男王子は無理だとしてもせめて細マッチチ
ヨベリこで止めておけば、バランスもよかつたのに。

・・・・・ちよつと残念なイケメンか。モテモテのはずだわ。

こんなちんちくりんを嫁にもうつ羽田になつてごめんね。

やつぱ、ボーン・キュツツ・バインの女優さんのほつがいの王子
様には似合つわ。

つて言いたくなつた。

これが私の旦那様か。

私の視線に気がついたのか、王子と視線が合つ。

私はふんわりと微笑んで見せた。

これからよろしくね。と言わんばかりに。

妻にはなれそうにもないけど、共犯位にはなれるし、友達になれた
らしいとおもつてる。

そんな気持ちを込めて。

1・3（後書き）

王子様の外見です。姫様的には75点とか思ってます。
まだ口に出してませんが。

姫様を見た王子様の評価はそのつまに。
ようやく「指先での手つなぎ」までこぎつけました。
でも手袋ごしだし、義務と儀礼ですから。
・・・・ノーカン・・ですよね？

1 - 4 (前書き)

マジマジ顔をみていたら
王子様がびっくり発言を。
SNDMどーろか急展開?

さて、いよいよ御対面とあいなりまして。

引き続いてのお披露目の晩餐会の前です。

王子様・クラクスー大臣・私は控えの間でお互いの顔をマジマジと見る機会をえました。

まあ初対面つてことですね。

王子様も露骨な嫌悪をこちらに示してきませんし、及第点はいただけたのではないでしょうか？

たぶん、ですけど。

私がらみましても。王子様は優しそうだし、それなりに教養ありそうだし、顔も背けたくなるほどブサイクじゃないし、触ると脂がしみだしてきそくなおテグでもないし。で良かつたと思つほじほつとしているわけですが。

王子様的にはどうなんでしょうか？

やつぱり妖艶な女優さんとか見なれると、私なんかお子ちゃんまですよねー。

わかっていますよ。でも、まだ15ですかー！

頑張れば好みに育つかもよー！

あ、でもウチの両親考えるとちゅうっと、いやだいーぶ頑張らないとダメかなー、とは思つナビね。

なんか、どうして黙つているのよ。

心にもないお世辞の一つや二つかまさないと、外交的こもせばいんじゃありません?王子様。

まだ晩餐までは時間がありそうです。

できれば一度座つて休みたいのですが、王子様。

「今まで人の手握つて立つてゐるつもりですか？
私、そんなに体力自慢にみえますか？」

そんな気持ちを込めて王子様の眼を見つめてみた。

人の顔みて、動かない王子様。

「あの。出来ればお時間まで少し休みたいのですが」
動かないならばしかたない、私が小声でそう告げる。
ここは少し体力ないアッピールしつかないと。
この国では女子も適性があれば騎士団に入るほど、女性の体力が
ある國らしいし。
そんな体力は私ないし。
そういう気遣いができないのかなー。と思つた。

「・・・ああ、気がつかなくて申し訳ない」

そう言つて私の手を引いて一人掛けの椅子に連れて行つてくれる。
ああ、よかつたやつと座れる。

ふわふわのスカートを一人掛けの椅子一杯に広げて座らうとした時
に、すつとメイドが寄つてきてお茶や軽いお酒などを視線で勧める。
「お茶をお願いできますか」

わたしは会話が進まない時のためにお茶をお願いした。

向かいの一人掛けに王子様がおかげになるものと思つていたのに、
王子様がスカートかきわけて隣に座らうとする。
あれれ？

何考えてるの。公式ドレスの時は向かいに座つてもらわないと。
それに気がつけばまだ手、預けたままじゃん。
スカートを整え王子様の座る場所を確保しなくちゃ。
手を取り戻して私はドレスを抑える。まったく。手間かかるわね。

下手に上に座られたら、しわにならかやうわ。

ドレスを整えよひとするべ、アンナがすつと寄つてきてドレスを押さえてくれた。

田でお礼をいづ。

隣に座つた王子様は盛装である軍服にたくさんのモールと勲章をつけていた。

そしてふわふわのドレスの一一番上、クモの巣みたいに薄いシフォンをつまんでいた。

ああ、なるほど、ドレスの生地が不思議だつたつてわけですね。そりや、これウチの最新技術のたまものですもの。まだ門外不出ですしね。

珍しくもあるでしょうねえ。

「姫。一段とお美しい」

(ドレスが) といつ言葉が透けて見える台詞。
まあ社交辞令の決まり文句ですわね。でもこゝはすくと頬を染めて、お礼を申し上げないと。

「・・・まあ、ありがとうございます。王子も素敵です」

・・よし、うまく行つたわね。

しつかし、この王子声も低くて二十に見えないくらい大人びてるな。5歳差で今年二十歳つてことは中兄さまより二個年下なんだよねえ。中兄さまよりずっとフケ・・いや大人びて見える。

声が低いから背中にゾクつとくるわ。

私幼くみえるらしいから、下手すれば夫婦どころか年の離れた兄弟ポジかなあ。

王子様は先の王子妃さまを、出産時に失くされてるから、その不幸がフケて・・・いやいや年上に見せてるのかもしない。

私と並ぶとやばいよなあ5歳どこのじやない差に見えるよつな。

もう少し大人っぽいドレスにすればよかつたかな。

でも新作のシフォン生地の発表の場もあるし、ふわふわドレス以外の選択肢なかつたし。

まあ、ここは開き直るか。

まだ、私15だしー。

中兄さまを基準に衣装考えてきちやつたしなー。

まさかこんなに老け・・ゲフン・・大人っぽい方だとは思わなかつたわ。

「姫、遠路よくいらしてくださつた。

仲良くやって行きたいと思うのでよろしく頼む。」

隣でワインのグラスを傾けながらそつ王子がいつた。

「はー、お心にかなうよう努力します」

お茶のカップを持ち上げながらそついた。

「姫、貴方に伝えなくてはならないことがあるのだが
そこで言いにくそうに言葉を切る。

な、なんかあるのかしら。やっぱ子供過ぎて無理だから帰れ、とか?
私はすこしひくびくしながら少し身体の向きを変えて王子様のほう
を向いた。

その視線を受け止めて王子様がゆづくつと話しだす。

「姫も御存じのことかと思うが、国王陛下の身体の具合があまりよ
ろしくない。

今日の晩餐会にも出席されない

まあ、お倒れになつた言つことは正式に発表されてるので聞いて

い。

正式な晩餐にも出席しないほどお悪いとは聞いていなかつた。

「お大事に、結婚式の前にお見舞いにおつかがいしたいのですが」
私はそうするようにとお父様お母様にも言われてきるし、お見舞
いは娘になる身としては当たり前だらう。

「いやそれには及ばない。離宮で静養なさつてゐるし。

結婚式には出席されると書つてきただのやうにあ逢いにかかる
だらう」

そこで王子の話は切れた。

ふむ、見舞いは不要と伝えたかったのか。

「父は、いや国王陛下は、私たちの結婚式を機に退位して私に位を
譲りたいと言つてきてる」

そこで一回話が切れた。何返事すればいいのよ。

「・・・・はあ、国王となられるつてことですよね。おめでとう」
ぞこます。」

気の抜けた返事が口から洩れる。

「貴方との結婚式と同時に戴冠式になるので、そのつもりでいてほ
しい」

戴冠式かまだ見たことないなあ。カッコいいだらうなあ。近くで見
られるのは幸せかも。

と思つたところで気がついた。

「あれ？・・・といふことは、私はどうなるのでしょうか？」

まさか、まさかですが。女優サマを王妃ポジにつけるので、脇で見
てこらとか？

「結婚式のあと続いて戴冠式をする。ところ」とで・・・あなたは
王妃となつてほしじ。」

うわー。どうしよう。そんな立派なドレスもつてきたつけ？

すごい話を聞かされた時、一番最初の私の頭に浮かんだのはそんな

疑問だった。

ウエディングはもつてきたけどウエディングのまま戴冠式ですか？
それはちょっとやだなあ。

あ、それとも「チラ伝統の王妃用ドレスとかあるのかな？

もう少し早くそういうことは言つてよー王子様！！

女の支度には時間がかかるんですね！

私のドレスを直していたアンナが硬直している。

つてことは外交ルートでもそんな打診は一切なかつたことかよ。
無謀にもほどがあるよ。

持ちあげたままのカップに口をつけていないくらいみなみと入ったお茶をじぼさなかつたのは奇跡だったと思つ。

だって、結婚式は10日後なんだよ。
どうじる？

1・4（後書き）

昔のドレスは手織物。

10日で戴冠式にふさわしいドレスを作り上げるのは無理だわ。王子様は軍服のままだからいいけどナ。

王子、オナンガロロとか国威とか少し考えてあげてね。武を重んじると嘗つてもちょっと連絡不足だと思います。

わて、姫はどいつも？

実家との距離は飛ばしても陸路3日+川の水路2日ほどかかります。

番外編 説明臭い何か『典礼について』（前書き）

説明をしなくてはならなくなりました。

説明要員をだしました。

すいません・・やうかしたかもしだせん。

番外編 説明臭い何か『典礼について』

どうも始めまして。

私はこういつものドレジセーです。

そういうて分度器で測つたかのよくなー5度の礼をされた。
すつと作者の前に差し出されたものは
作者には見慣れたはずの名刺、というもの。

この世界に在ると設定したつけ?と思いつつその名刺を受け取る。

さて、伊達様。

このたびはわが世界を物語にしていただきありがとうございます。

作者は、「いえ・・・」と面おおとして制された。

このたびはわが国の魔法使いの計らいにより、説明の任を仰せつかつて参りました。

しかし会話はできなくなつております。

私めの一方的なご説明をお聞きいただければと思つております。

会話になつてしまひますと、双方の世界によくないと聞き及んでおりますので、

そのあたりは「了承くださいませ。

そう言つて私の前の音楽室のモーツアルトのような格好をした人は一礼した。

頂いた名刺には、透かしが入つており、その上金箔の王冠マーク。下にはなぜかカタカナで『レナード・スマラックス』と印字されていて。

その上に書かれた肩書きは、『アルシス王国典礼官』と書かれていた。

つまりこのモーツアルトも僕たんは今書いていてちょっと行き詰ってしまった物語の中の人、といつことりじい。

うわー。あたしイタイわー。

でもどうしようかと思つてて、重大な問題で行き詰つてて、これないと
も確かだし。

その解決の糸口になるなら話だけでも聞いてみるか。

熱帯夜確定の気温30度からさがる気配のない午後9時。
節電のため昨夜充電しておいたノートパソコンを開いて続きを書こうとしていたあたし。

そのPCをさっさとシャットダウンしてレナードさんに向き合つた。
では、「説明申し上げてもよろしいか、伊達殿。
あたしは同意の印に、深くうなずいた。
手にはミスコピー《チラシのウラ》とボールペン。
がつたり聞く気満々です。

ただいま、伊達殿は大陸で神国を含め3番目に長い歴史あるわが国の典礼のしきたりと、末姫様が今度嫁がれるご予定の大連の新興勢力であり、武を重んじるタンジール国の典礼の違いをどう書いたらよいかと悩んでる、と魔法使いは判断されて、私めを遣わされたのだが、それで状況はお間違いないだろつか？

レナードさんは、手にしたメモといつにはあまりにも仰々しい羊皮紙のようなものを見ながら話しかけてきた。
あたしはそれに「ククク」とうなずいた。

しかし、今の説明超嫌味臭い。

レナードさんアーシュ姫のこと好きだったのかしら？

タンジールのことめっちゃ見下していたわねー。

いいもんなのかしらー。だつてアチラの方が大国なんでしょう？
強いらしいし。ま、あたしには害害ないし。いいか。

では、説明に入れます。

タンジールは現在の王で3代目。姫のお相手がもし即位ということ
でしたら、4代目となります。

建国よりまだ50年ほどになります。

へー。若い国なんだねえ。それであんなに広い土地を治められるな
らす「じいじやん」。

レナードさんの書つ言葉を昔獲つた杵柄で速記もどきで書き付けて
いく。

メモ『チラシの「ひり』から顔を上げて続きを促す。

ただいまのタンジールの版図となつたのは現王の時代になつてから
であり、その前のタンジールは、ただの地方豪族に毛が生えた程度
でございまして、国交もほとんど結んでおらず、正式な国家と神国
から認められましたのは、カタグ暦2064年、今よりたつた17
年ほど前のことです。

ほー。倒れちゃつた方つてそんなすごい方だったのねえ。

こつちで言えば、モンゴル帝国とかナポレオンみたいな感じかしら
」。

タンジールの現王にはお子様が3人おられ、王子一人にその姉上に
当たられる方が2名。

すべて軍功のあつた家臣がその子息に嫁しておられます。

かの国考え方では姫には相続権はなく、そのお相手の家の格に準じた扱いを受けていらっしゃるそうです。

姫様のお相手になられました、フィジヨン王子ですが、15歳の時に現王の右腕であつた騎士公爵、これは、かの国だけの爵位でして、武功のあつた將軍クラスに与えた称号で、その後を継いだものが従軍しなくては消滅、従軍しても軍功なきものは廃嫡という、一代限りにかなり近い称号だそうでございます。その、娘（当時17歳）を娶り、2年後第一子、コラリス姫を設けたが妃は出産の肥立ちがわるく死亡。姫は順調に育たれて今年3歳になられる。

ウチの姫がなんで後添えで、15歳にして3歳の子持ちにつ。
・・・失礼いたしました。

そりやあ、アーシュちゃんの立場はつらいよねー。

で、今まで碌な国家扱いをしてこられたタンジールには國家継承におけるしきたり、外交儀礼などなどのノウハウが蓄積されておらんのですつ。

きっとタンジールのことですから、『近隣の諸国の代表集まるし、ついでに戴冠式もやつとくか』くらいの認識しかないと思われます。今までの継承も、命にかかるほどの怪我をして帰国した初代の王が一代目に血塗られた剣を渡して事実上の継承だつた、という故事にならつて、その初代の王愛用の剣を渡したら『継承』としていたようです。

つてことは、会社で「まあ、後はよろしく頼む」みたいに引き継ぎの書類に判子押して握手。で、部長交代。みたいな感じより簡単に継承されてきたってのかい？

いい加減というか大雑把というか。書類ない分いい加減かも。

判子わたして、「じゃ、たのまー」みたいな感じにちかいのかな？

それが王家継承だなんていい加減過ぎるよ・・・。フイジヨン君。自己完結しながらフムフムうなずいた。

それに引き換え、わがアルシエス国は今年で建国716年目を迎えまして。

神国、クニネム国について3番目に古い国家です。アーシュラーナ様のお父上であられる現王陛下で63代目を数えております。継承式も盛大に行われます。しきたりもたくさんございまして、準備にも2～3年の歳月を費やします。

ほーほー。そういうやウチの今上陛下のときも凄い織物とか晩餐とか招待客だとかあつたね。

もう20年位前だつたけどかなり華やかっぽかったわなー。皇太子殿下と雅子妃殿下の時の結婚も華やかでしたしねー。あれ?もしや、タンジールつてものすごい大雑把にみんな集まるからいいだろ。

とか思つていい?

お祝いだし同時にやつちやう?みたいなノリなの?

それつて、国家的にめっちゃ準備に時間がかかるし、出席者もそれなりに御支度がいるんじやね?

二倍どころか3～4倍の労力が要りそうな・・・

あたしは、その規模とか式典の警備とか式進行の調整とか。同時にやつちやうの?

それとも日を改めるの?

そんなことを考えて呆然とした。

そして主役の一人であるアーシュちゃんが一番最初に心配した、お衣装。

主役それも女性のお衣装によって式典の格が決まるといつても過言ではないよなあ。

あたし設定中世末期ヨーロッパあたりっぽい感じにしてたし。

おわかりいただけましたか？

あの王子がやらかそうとしていることの重大さが。

その上、王子ときたら…！

『あー、レナード。その先はだめだよー。』

学校の校内放送のようにちよつと響いた声で聞こえてきた声。
誰これ？という思いも込めて首をかしげる。

『作者さん《だて　ししい》にはそのうちお皿にかかりますよ。
今は魔法使いとでもー』

なんか気の抜けた声だなあ。
ふむふむ。

つまり王子様は成り上がり発言＆行動全開中でイタイつてことなか。

自分の結婚式でもあり、長い歴史のある国から嫁いでくるアーショ
ちゃんはそれをどうにか近隣諸国に失礼に当たらない程度の見栄え
のする式典ものにななくちゃいけない上、自分の支度も整えなくち
ゃいけないのか。

そりや、固まるわな。まだ15歳なんだしねえ。

お分かりいただけましたでしょうか？伊達殿。

眉間にグワッとしわを刻んだレナードさんが怒りを抑えきれずにこ
つちを見てきた。

そりや、こっちだって社会人暦10年を超えるオトナですし。冠婚
葬祭色々庶民レベルではありますが経験しきっていますし。

こんな結婚式や葬式絶対ヤダ、恥ずかしすぎつってのも何個か見てますし。

それを国家レベルで、成り上がり国家がやつちやつたとしたら。
そりゃー。恥ずかしいわなー。

それじや済まないし、今後の外交の場で不利になるかも知れなによ。ね。

丁手すりはアリジ二八までとはいかりたよれど

その間になんで指導しな

うわー、うわー。大変じやん！！

あたしは頭を抱えてしまつた。

これが田舎の風景だらう。

「作者歎　姉の幸せのためかんにこてぐたさしねー」

以上、現状報告でござります。伊達殿。姫をアーシュ様をどうかお救いください。

レナードさんがものすごく美しく45度に腰を折る。

それと共にまるでTVのスイッチを切ったときのように一瞬アルトもどきの姿が搔き消えた。

「フィジヨンのばかやう。爆弾発言のせいで、プロット台無しじやねえか！」

あたしはメモ『ちらしのカワ』を眺めながらそういった。

そして人物設定をまとめてある、ノート『ネタちょう』を取り出すと。

フィジョンのページに設定を新たに書き込んだ。

番外編 説明臭い何か『典礼について』（後書き）

次から本編に戻ります。すいません。

1・5（前書き）

長くなりましたがので2つに分けました。
評価ポイント。お気に入り登録ありがとうございます。

もつすぐ始まるはずの、私を正式に紹介するための晩餐会。その控え室で私は夫となる人についた。

たれ日が全体のバランスを残念にしてしまった、マッチョ・メン。それがこの軍事大国の唯一の王子サマ。フィジヨン殿下。で、私は10日後にこの人と結婚することになつていて。

私が頭の中で走馬灯をグルグルめぐらしているのは、その結婚式と一緒に戴冠式をやると、この残念なイケメンマッチョ、略してザッチョ、がこんなところで言い出したから。

そして、戴冠式の話は、私、すなわち結婚相手であり、『ついでに王妃にならねえ?』と言つべき相手にはまったく知らされてなかつた上、おそらく両親にも伝わっていないだろう。

ということは、この国は私を、私の祖国をないがしろにする、と宣言しているようなもの。

しかし、面と向かってこの王子を叱責するわけにはいかない。ここで諂ひなど起こせばそれこそ外交問題になる。

たとえそれが義憤によるものだといえども、だ。

私はゆっくりと手に持つたティーカップをソーサーにもどす。

ここはどう対処するかによつて私の評価もアルシェスの評価も決まつてしまふかもしぬ。

なんか、もしかして試されてる? 私?

この国に入った時点では私は、良くも悪くも『殿下のヨメ』であり、この国に属するものとなる。つまり、面と向かって王位継承者を叱責することは不敬罪で処分されても文句はいえないのだ。

もしこれで近くの警護の兵士などに当つ散らせば、祖国の評判を落

としかねない。

私が直に叱責しても大丈夫なほどの高位の者。
そこに、いるじゃない。

私は内心ほくそえんだ。

バシン！

私は怒りを込めて手にした扇で椅子の肘掛をたたいた。
その音に部屋にいる全員の目が集まる。

ターゲットも。

私は押さえに抑えた怒りを声にした。

ちょっととまがつてしまつた扇を少しだけ広げて口に当てるべ、ター
ゲットとなつた男をにらみつけてゆつくりと口を開いた。

「クラクスー大臣。これはビリーヴィーことですか？」

このような大事を私を迎えていらっしゃるとき一言もおっしゃいま
せんでしたわよね？

確かにアルシェスは小国ですが、このようになイがしりシされると
はおもいもよりませんでしたわ。」

私はクラクスーをしきりながら扇で片手でチラリと王子を見やつた。
王子は私の言つことを聞いてはいるが、その表情に変化はまったく
見られない。

つまりこれは、アルシェスを属国とみなして格下の扱いをしている
と王子自身がいつてているようなものなのだ。

焦るとか、取り繕うとかそういう行動は一切ない。

それどころか何で私が怒るのかわからないといつかのようになイつち
をみてきた。

この人、何考えているのかしら。

でも、ここは抗議しないと外交ならば対等が基本。

対等に扱う必要もないという、意思表示なのだとしたら。

ここは怒りを見せておかない、でもキーキー怒つても大人気ない

し。

そうだ嫌味よ！嫌味かましてやるわー！

クラクスー大臣が言い訳をしようと口を開きかけた途端。

第一の爆弾が王子様から投下されることを私たちはしらなかつた。

1・5（後書き）

どれだけ、王子視点なしで行けるか。
変な意地になつてきています。

1・6（前書き）

行事といつのは、行事が始まる前までに八割の作業がおわっている
もんです。
ですから、前置きは長いのです。

「大丈夫だ。姫の国をないがしろにしているわけではない。戴冠式のことを知っているのは王・王妃・俺以外では姫、あなたが始めてだ。」

扇をもつていらない手をとつて王子が言つた言葉にまた私は固まりかけて、なんとか自分をたもつた。奇跡的に。
目の前が少しチカチカする。気を失わなくて本当によかつた。
この人は招待客に伝えるという最低限のマナーすら知らないってこと、なのかな？

「王子、それ、冗談です、よ、ね？」

手の中で扇が悲鳴をあげるかのようにヒリヒリシッといつた。

「冗談ではない。今日晩餐会のスピーチで発表の予定だつたのだが、それでは姫にフェアではないかと思つて先に知らせたのだが

。

「あ、ありがとう・・・」「ゼイ、ます？」

少しでも早く知らせてくれたことはありがたいのだが。

これはありがたいところなんだろうか？

晩餐会で倒れるよりマシってところかしら。

それよりも氣になることがある。

「あの、王子様？」

お礼に疑問符が付いていることに気が付いた王子様が私を見る。

その視線にちよつと戸惑いながらも、一度疑問を投げかける。

「ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんなりと、姫」

「あの、こつ戴冠式をやるって御決めになつたのですか？」

「ああ、3日前だつたか」

ばかー。4日前の私本当にばかー。

温泉でピカピカツルツルになつてゐる暇なんてなかつたじやないかー。
せめてその時点で知つていたら。もう少し何とかできたのに。

温泉でのんびりしてゐる暇なんてなかつたじやないのー！

てか決まつたら早馬でもなんでもいいから教えてくれればいいのに。

私は自分が悔しくて、少し涙田になりながらも王子を見上げながら
にらみつけた。

すこし王子がひるんだのみでいい気味だとおもつた。

「戴冠式と一緒にやるかと思つたのは、国王陛下を見舞いに行つた
時に陛下のほうから譲位を伝えられて、一緒にやつた方がいい
のではないかと城に帰還してから思ついたのだ。その了解を得る
ために陛下と手紙でやり取りしていた。
すまない、浅慮だった。貴方にも伝えるべきだつたのだな。」

私にもだけど、周辺諸国にもだろー！
とこう叫びを私は飲み込んだ。

せめて、此の事をアルシスに伝えないと。

手の中の扇を握り締めると、キシッと音をたてた。

「王子、申し訳ないのですが、ちょっと打ち合わせを侍女としなくてはなりませんので、晩餐を一〇時まで遅らせていただけないでしようか？」

「何か、必要なのか？」

王子が心配そうにいう。

必要なものだらけだよ、決まってるだろ。

戴冠式の衣装どうすんだよ。国許にも連絡しなくちゃいけないし。時間が惜しいんだよ。

「ええ、実は扇を壊してしまいました。侍女にとりにやりたいと思うのですが。」

そういうと今まで手に持っていた扇をアンナに渡した。

「お兄様にもらった物をもってきてね、アンナ」

そういうと、アンナはすっとお辞儀をして出て行つた。

こうして行かせてしまえば、晩餐は延期せざるをえない。

開始の遅れを伝えるために何人かの侍従もアンナとともに出て行つた。

『おにい様にもらったものを持ってきてね』つていうのは重大事がおきたときに使う、アンナと一人の間で決めた暗号みたいなものだ。國許に連絡を。という意味になる。

『おにい様にもらったものを持ってきてね』つていうのは重大事がおきたときに使う、アンナと一人の間で決めた暗号みたいなものだ。國許に連絡を。という意味になる。

そつして王子に向き直ると、私は普通の笑顔を貼り付けてきいた。

「お待たせする間、お伺いしたいことがあるのですけれど。」

私たちが歓談体制に入ったのを見ると、クラクスーが侍従を呼んでなにやら密談している。

結婚前の私たちを一人にするわけにはいかないものね。

侍従やメイドがいるけれど、彼らはとめる権限をもたないしね。侍女でもあり、貴婦人もあるアンナが帰ってくるまではお目付け役としてクラクスーは動けない。

ざまあみさうせ。おほほほ。

「なんなりと、姫

王子がこちらを見る。

しかし、きれいな縁の田だなあ。「いやましい。そのきれいな目に映る見栄えのしない自分が田の中に浮いたじみのように感じる。

姉さまくらい綺麗だつたらよかつたのになあ。

こんな綺麗な目に映るのは正直いたまれない気持ちになる。

「まずお伺いしたいのですけれど。

姫君にいつお会いできますか？」

その途端王子の田^だが少しつりあがつた。

やべ、地雷？

ここは知らぬ存ぜぬで15歳の少女のふり。

「私、母としてではなく、お友達か姉妹のように仲良くなれたらと思っています。

丁度、大兄さま・・王太子殿下のお子様が同じ年ですし、国許でも

なんどか遊び相手を務めたりいたしましたのよ。お会いできるのを楽しみにしてまいりましたの？王子に似ていらっしゃいますの？」

「3歳だつていうし、可愛い盛りの女の子だといひし。
色々おもちゃやドレスなんかも持つてきましたしね。
なんか、王子どころかクラクスーの表情も冴えないけど。どうしたのかしら？」

「姫。娘は・・・そうだな、かなり人見知りが激しいのだ。
それに・・・身体もあまり丈夫ではない。

式が終わつたら逢わせるつもりでいたのだが。」

「歯切れが悪いわね。なににあるのかしら？
まあ、おこおいわかるでしょう。」

「そうでした。よく存じ上げないのに浮かれてもうしわけありません。

わたくし、末っ子でしたので、妹ができるのだと思つて楽しみにしておりました。

浮かれて申し訳ありません

私も少し寂しげにしてみる。

この国、少なくともこの姫は色々ナーバスになるポイントなんだろ
うね。

今度から気をつけよ。

「いや、姫、やさしいのだな
そういうて私を見る。

くそー、なんだその「とつてここを褒めて？」といつてる犬みたい
な瞳は。

「いえ、よく知りもしないで出すぎた真似をいたしました」

そういうてとりあえず笑つた。

娘という地雷があることがわかつただけでも「ひはヨシ」とじょり。

1・6（後書き）

10□11（時間単位）= 1□115分くらい。
つまり一時間ほど落ち着く時間がほしいことがありますね。

あと姉さまは「番外編」の内容をいじあつません。

1・7（前書き）

色々資料を読んでいたらよけいに頭が混乱しました。
戴冠式・結婚式の資料は本当に読んでいて楽しいのです。

「あの、殿下。お伺いいたしたいことがまだまだたくさんあるのですが、続けてもよろしいですか？」

私はふわふわに重なったシフォンチュールのドレスのひだの中からメモ用紙と簡易ペンをとりだした。

初めての晩餐会のしきたりの違いをメモするためにもつてきましたけど、今使わずにいつ使う！的なものになってしまった。こつそりメモポケット作つてもらつてよかつた。

ドレスメーカーのスーリア夫人には、

『普通なら化粧道具入れとか、ハンカチ入れ、サッシュ入れとかの可愛い隠しポケットの依頼だつたり、アヤシイところでは護身用ナイフ入れとか、百歩譲つてあんなこんな薬入れとか、をドレスに仕込んでくれ、つて言うならわかりますけど。姫様。メモ用紙入れとインクが染みださないようなカバーとか・・・。ホント色気も素つ氣もない依頼をくださいますわよね』とため息交じりに呆れられたものだが、作つてもらつて本当によかつたわ。

もう外聞なんてかまつてられるか。

あと10日で人生の一大イベントを2個同時にこなさなくちゃならない上、ここは完全アウエイ。

右も左もわからない場所ときたもんだ。

誰に何を頼めばいいのかもわからないし、そもそも私に指揮権が少しもあるのかもわからない。

そんな場所で、諸外国の要人の目の前で失態なんかできるものか。

国元じゃ、典礼の姫とか呼ばれて、何かしら行事がある時の女性のドレスコードの基本とも言われたくらいで、そのためにいつも誰よりも一番に式典用ドレスも発注しなくちゃならなくて大変だつたん

だから。

そんな私が、場違いでハズしたドレスなんかで式典に参加なんかできません。

私のアイデンティティの問題なんだから。

断れるものなら断つて見る。塩とともに荷車に乗つても帰つてやる。

そんな決意をまなざしに込めながら王子に対した。

こうなつたら多少のマナー違反は田をつぶらなくちやね。

結婚前の男女が同じイスに腰掛けているだけでもすでに十分、マナーに反しているんだし。

王子はゆつたりとグラスを揺らしながら私につなぎいて見せた。
なんだコイツこの優越的な態度は、本当はオマエが一番あわてなく
ちゃいけないんじゃねーの？

内心むつとしながら声には出さないよう質問を続けることにした。
かんしゃくを起こすのはいつだってできる、こまはこの状況で少し
でもいい方向に持つていふことができるように行動しなくちや。

恥をかくのはコイツだけじゃない。

私や國元も恥をかくことになるんだし。

もし少しでも恥をかくようなことがあつたら聖堂前離婚してやる。
頭の中でものすごく悪口を目の前のマッチョ王子につきつけながら、
私は曖昧な微笑みを浮かべて王子に質問することにした。

「この国のしきたりについて知らないことが多いのですけれど、戴冠式とはどのようになさるものなんでしょう？」

我が国では神国よりそれなりの神官殿をお呼びして戴冠してもらい、近隣にも知らせをしたりしてかなり盛大にやるもの、ときどきおり

ますけど。そういうしきたりに詳しい面職のかたとかは「この国にはいらっしゃいませんの？
ぜひお会いして、この国のしきたりなどきちんとおつかがいしたい
んです。殿下に恥をかかせたくはないけれどもませんので。できれば本当に今すぐ！」

「今すぐ？そんなにいそぐのだ？なぜ？」

王子はそのたれ田から繰り出される視線は睨みつけてるようだけれど、お預け食らつた犬のように首をかしげてるところでその威力は半減しどるわ、必要だからに決まつてゐだらば。

「私も式典の当事者です。それも戴冠式のときは殿下のおやぱにいなくてはなりませんでしょ？」

慣れない進行で失敗して恥をかきたくはありませんもの。」

すくなくとも式次第が詳しく知りたいんじゃ。式次第の内容を見れば大体なに着ればいいか見当がつくんだよ。おしえろや。この鈍感ザツチヨメンめ。

「ああ、それなら心配することはない。」

なにそれ。たつてりやカカシでもいいってことですか？

私が首をかしげていると、また近距離で爆弾が落とされた。

「しきたりなんてものは、この国にはないからな。だからしきたりに詳しい官職などおいてない、あえて言えば父上母上か。」

それを聞いたとたん、田の前が暗くなつた。

なんですよー！

視界の60%位が暗くなつた。久しぶりに倒れると思つた。
前のめりにぐらつく、ヤバイ。

「姫様」

ふらついた私を支えてくれたのは田の前のマッシュチョではなく、侍女のアンナと一緒に駆けつけてきた、騎士団娘。その腕の中で彼にだけ聞こえるようにひとことさやくと私はゆっくりと身を起こした。

途中で、隣の王子殿下を一瞬睨みつけた。

このザツチョ。役に立たねえ筋肉ばっか付けやがって。隣に座つてる女一人さえられねえのか。

どんどん私の中で未来の旦那様に対する点が辛くなつていいくのはなぜでしょう。

1・7（後書き）

どんぢん姫様の口が悪くなつていきます。
びひつてなんだかうつ・・・。

1・8（前書き）

お読みいただいてありがとうございます。
お気に入りに入れていただいたり、POINTもあります。

何よりも励みになります。

さて、ご招待する時、席次や招待する人を絞り込むのは大変です。最近はマナー やしきたりを軽視する方も多いですが、その決まりごとがどうして今まで受け継がれてきたのかとか考えるのも新しい視点を手に入れるチャンスだと思います。是非色々調べてみてくださいね。

「では、殿下。私を式典の責任者にしていただけないでしょうか？」

私の口から滑りでた言葉に自分でも少しうきうきする。

でも、考えてみるとそれが一番いい方法のよつた気がしてきた。

騎士の肩にすがりながら身をゆつくりと起こす。

そして、なるべく目に力を入れて王子様に訴える。

その滑り出た私の思いつきの言葉に私を支え起こしてくれた騎士が一瞬ちよつとだけ身を固くする。

「『』めん。あとで説明するから、お願いまかせて。」

私は彼から身を放す瞬間こいつそりそりとやいて先ほど作ったメモを肩当てと方の間にわしこんだ

「ありがとう。カルロ。今頃旅の疲れが出たのかしら？少しめまいが。」

そう言って勢いをつけて身を放した。
そして支えてくれた礼に微笑む。

「いえ、間に合って何よりで『』ぞいます、姫。

お加減の方は大丈夫ですか？ 晩餐会を中止にしていただいたほうがよろしいのでは？」

本当に心配そうに私の前に膝をついたままカルロがそう進言した。
その手はまだ私の肩を軽くつかんだままだ。

それなのに彼の視線は私ではなく隣の王子にくぎ付け。
なんか周りの気温が下がったような気がするんですけど。
もしかしてにらみ合ってる？ 私からは見えないんだけどー。

「大丈夫よカルロ。まだ始まるまで時間もある」とです。」

そう言って彼から身を少し放した。

私は多分にらみ合つたままの二人が放つ空気がどんどん冷えて行くのが怖くて、とりあえず間に入つてみたんだけど、なんか余計冷えた気がするよ。

二人にそれぞれ視線を投げかけると一人からにらみ返された。なんで?

ちょっと状況が呑みこめずに困つていると、後ろからスッと扇が差し出されるとともに優しい声がかけられた。

「姫様。」

アンナがそう一言声をかけてくれたので、ほっとして微笑みながらアンナを見る。

ありがとうアンナ。視線に感謝を込める。

そして、アンナから差し出された新しい扇を受け取つた。その扇を優雅に音もたてずに開いて、口元に持つていく。

「しかして、殿下。おまかせいただけますの?」

言葉を選んで、それでも優雅さと無邪気さは失うことなく威厳を込めて。

ふんわりとした微笑みを目にしつかりと宿して。

しかしその口調は毅然と。

”断れるもんなら断つて見やがれ。”という思いを込めて。

ぶつちやけ言わせてもらつと、曲がりなりにも自国で『典礼の姫』とまで呼ばれた私が。

こんな典礼の初歩の初歩も知らない国がみすみす目の前で私を巻き込んで大失態をやらかす片棒を担ぐのはまっぴらな。

近隣諸国だって、私にお伺いの手紙をよこすことだつてあるのよ? 今まで呼ばれた私が。

みつともない結婚式や戴冠式なんかやらかしたり、訴訟ガタ落ちのうえ後の指さされるかもしれないじゃないの。

「日本の王子サマのマナーもなってないし。

このままこの人が国王となつて外交儀礼がちやんと出来るとは思えないよね。

すくなくとも私がこいつばかりかしい思いをしない程度には取り繕つていただかなないと。

とつあえずは、日本の10口だ。

「もしお断りにならぬよつとしたら、あつと私より式典その他諸々に精通してこいつしゃるのじょつね。是非じ紹介いただきたいものですね。」

――――――――――

覚悟しとけよ。王子サマ。

典礼の姫と国内外でお世辞やおべつかで呼ばれていたわけではないんですよ。

「あ、私の指示を聞いてくださる官吏ももちろん、付けていただけるのですわよね？」

そう駄目押すと、広げた扇を一瞬でたたむ。

そして、今氣がついたかのよう、魔時計に手をやる。

「あり、一度10口一経ちましたわね。晚餐に御案内いただけますか？」

やつらひひすりと手を差し出した。

悔しさうに睨みつけたといひで、そんなもん何の役にもたちませんわ。

交渉は駆け引や。

剣よりも口先のほうが強いこともあるのですから。

あらあら、密のグラスを握りつぶすなんて。
私の王子さまは、なんて野蛮なんでしょう。

1・8（後書き）

20歳の男子（子持ち）が15の小娘に言い返せないのはつらいだ
ううね。

ごめんね。王子様。次回は王子様のターン・・・になるといいね。
(希望的観測)

1・9（前書き）

ようやく晩餐会の開始～～

基本は日本の富中晩さん家の様子をもとに書いてあります。
間違っていたり、適当などいるもあると思います。

しかし、ザッショヒシン姉「あまあま」になる（予定）がどうぞ
んずれて・・・

私の差し出した手を立ちあがった王子サマがとる。
その手を支えにしたよつに立ち上がる私。

でもね、本当の淑女は全体重を相手に任せたりしないのよ。
ふんわりと体重の三割位を相手に預けて立ち上がるのや。
淑女は、自分で立ち上がれるだけの体力を持っている、細マツチヨ
が基本ですわ。

もちろん柔らかいといひは柔らかく、ですけれどね。

私が立ち上がるのを見計らつたかのようにフアンファーレが鳴り響
き、晩餐会場への扉が開かれる。
さあ、正式なお披露目が始まり始まり。多分完全アウエイだけど、
頑張るよ。

開かれた扉の先は今宵のための大広間、晩餐会仕様になつてゐるは
ず。

つてことはこの国がどういう感じで公式の場をしつらえているかわ
かるつてことよねー。

まあ基本は3パターンだからそこからバリエーションをかませるか
どうか、がセンスの見せどころだよねー。

この国はどうもなすつもりなのかなあ。

晩餐会会場には、聞いた話では一~三百人のこの国の貴族。それに近隣諸国の大使の姿。

私の提示した10コ一の間にある程度の情報は彼らに伝わったどうか。

まあ、どこの国も諜報活動はしてるだろうから、ある程度の情報はつかんでいるんだろうけれど。

私はその中をしづしづと進みたがつたんだけど！

私の手を引くこのザツチョ王子サマがズツカズツカ大股で歩くもんだから、こちらは小走りになってしまった。

小走りだって優雅に歩いてるよう見せますわよ。

それぐらいできなくて、どうします？

この戦馬鹿、少しば女に気を使え。

エスコートもできなくて前のヨメはよく我慢したな。
もしかして、扱いが荒くて纖細もしくは病弱だった先妻さんは傷くなっちゃったのかしら。

てか、この行動はもしかしなくてもさっきまでの控室でのイヤミへの意趣返し？

だとしたら王子サマ。相当ガキくさいわー。

あつという間に主賓の席に着く。

ゆつたりと手を放し・・・とかおもつたらザツチョ、振り切りやがつたよ。

こんな衆人環視のなかで、こんな心のままにふるまつていたら格好の噂話のエサになるじゃねーか。

ま、それならそれで。

必殺『実家に帰らせていただきます』か

小柄で年より幼く見られがちのこの容姿を利用して『王子サマが苛

める『『大きすぎて怖い』とか震えて見せるのもいいかな。表面を取り繕えなくて損するのは、どちらにしろザッショ王子サマだしー。

さて、まず、ワタクシ達の婚約を祝うスピーチが両国代表からあり。そのたびに乾杯。につこりとほほ笑んで皆様に御挨拶。

なるべくバカっぽく、幼く、そしてトボケて見えるようにね。

そしていよいよ。

大問題の王子サマからの御挨拶。

まさか、この王子サマ、スピーチできないとかないわよね？
その可能性に田の前がちょっと暗くなった。

スピーチ用の原稿を取り出すのかとおもいきや、
残念なマッシュの王子サマはそのまましゃべり始めた。

おいおい、警え暗記しているとしても、カンペ位用意しようね。
今までの大使達だってカンペチラ見しながらやってたでしうが。
彼らの立場考えてやんなよ。

つてかコイツ、もしかしなくても俺様属性なの?
なんて面倒くさい性質なの！

はらはらしながらそのスピーチを聞いた。

王子サマは非常に偉そうに上から田線で婚約の祝いの礼を述べる
とからスピーチは始まった。

まあ、国内中心の席だし。合格すれば、六十五点。

両国の末長い平和と繁栄を・・・祈らないの？

いきなり、戴冠式を同時開催を発表かい！

各國大使に國元への連絡を要請。

もう代表団國元出発しあつて間に
合わない国もあるとおもつんですけどー。

ダメダメダメダメコイツ。

比喩ではなく本当に傷み始めた頭を抱えそうになりながら遠い田で、
國元のお父様・お母様を思つ。

とつねま、かあさま、ワタクシやつて行ける自信がありません。
帰つてもイイデスカ？

そんな物思いにふけつて、魂を実家の両親のもとへ飛ばしていた私が現実に引き戻されたのは、未来の旦那様がいきなり乾杯！をやらかした時のこと。

こんなにぼんやりしていなければ止められたのに、と悔やむ。

冷たい目線を隣の未来の旦那様に名流す。

もう、点数・・・どんなに甘く点つけてもマイナスなんですが。
しきたりもなにもあつたもんじやないわ。

仮にも「王座主催」の「晩餐会」でこんなグダグダが起るなんて！
こうなつたら何としても、あと9日でマナーをしきたりをこの戦バ
力に仕込んでやるわ。

『典礼の姫の名に賭けても！…』

私は心の中で握りこぶしを握った。

あと9日。

もう少し洗練された晩餐会を結婚祝賀の際には開いてみせますとも
や。

乾杯が終わったところで、私は席につくと、ペンと紙を取り出して
せつせとテーブルの下でメモを取り始めた。

必要なもの、宫廷での付け焼刃でも構わないからの教育。

最初のメモはそう書きつけられた。

私の手元が見えるのは隣に座った王子サマだけ。

その王子様は私に背を向けて、私のすることなんてどうでもいいと
いう不貞腐れた態度でお酒をかづくらっている。

酔つて醜態をさらさなければどうでもいいです。

私の邪魔だけはしないでくださいね。

さて、リネンの新調の確認・・カトラリーのチェック・・『婦人
の洋服のダサさもなんとかしないとね。

軍服・モールとかちゃんと人数分あるのかしら？

いざとなつたらウチから連れてきた兵士を使いましょう。

あとは魔法使いに連絡をとつて、無理でも色々転送してもらわなく
ちゃね。

あ、この国に転送の魔法陣・・・あるのかしら？

にじめかにあいさつに答えるながら私の両手は食べるよつともつぱり
メモに費やされた。

1・9（後書き）

ザツチヨ、サイテー。
が姫の印象。

なんだこの小つるさい小娘は。
が王子の印象。

ほんと糖分はどうに・・・めんなさい・・・

1 - 10 (前書き)

間があいてしまいました。

ヨーロッパの国のマナーもその国によつて微妙にちがうんですよ。
ちなみに日本は英國準拠、ちょっとロシア入り。だそうです。

さて、とりあえず挨拶も終わり、楽しいお食事タイムの始まりです。色々視線を感じるけどそれはまあ、ほおっておこう。色々ストレス感じるところ飯おいしくないしね。

それでも私はさりげなく周囲を見回しながら料理を口に運ぶ。ウチの国はここよりも温暖で海洋国家もあるので、それまでのこじり系煮込み料理よりも素材の味を生かしたシンプルな料理法がはやっている。

しかしこちらでは素材の問題などもあってそういうものだらう、手の込んだこじり系ものが多い。味が濃い、塩味がきかせないない分油分でこじりと料理されていることが多い。

いや、コースの「うち一つとか二つならまだ食べられるナビ」。まず、チーズふんだんにかけた温野菜サラダ（つまりグラタン一歩手前）。

次が川魚の素揚げ、あんかけソース（つまり油味）次がメインのお肉。なんでこんなに厚く切った！って感じの焼いて塩かけただけのもの。

ここまで来て私の胃は悲鳴を上げた。

ただでさえコルセットで絞めてるのに、入るわけないじゃないのっ。

おなかにたまってしまいし、口の中がなんか油っぽい。

お酒で流し込むザッショにはこれでいいかもしないナビ、あたしにはきついわ。

お肉を頑張つて三分の一くらい口にしたところで、やっとカトラリーを置く。

給仕が寄ってきたので、相談してみることにした。

「わたくし、まだお酒はたしなみませんの。口をすりきつさせる飲み物などありますかしら？」

乾杯のとき少しだけ傾けたグラスを示して、お水を要求する。給仕は一瞬固まってから頭を下げてそそくせと下がつていった。

水はウチよりいいはずだし、楽しみ。

早くお水～～～～。

口が粘つこじよ。塩っぽいし。

さて、次の料理がくるまでは観察を続けるかな。

私の近くに座つてらつしやるご婦人方のドレスの「デザインは」と。ウチからみたら3～4シーズン遅れ。

私が10歳のお披露目の時に着たドレスとそっくりなドレスを着た妙齢な、というか年増のご婦人がいらつしやる。

べ、別に自慢じゃないが、あのデザインは幼児体型の10の「どもだから似合つのであって、

もう社交界デビューを果たしたお姉さまが着るものじゃないと思つ。はつきり言つて痛い。

また隣の娘が着てているのはそのとき姉様が着ていた顔立ちがはつきりした美人限定（まちがつても私じゃドレスに負ける）の「デザイン」だし。

はつきり言つて似合つてないなあ。せめて色だけでももっと自分に合つ色にすればいいのに。

他にも私や姉や母様のドレスをコピーした人がおおいなあ。なんか恥ずかしい。

しつかし、これドressesメーカーのリリが見たら卒倒しそう。つか片つ端から剥いで説教だな。

リリは今どこにいるんだろう。

一応私の侍女としてつれて来たけど、もしこんなところ見たら凄いことになりそうだわ。

そして、心のメモ帳に『リリには舞踏会を見せないこと』とこう文言を刻んだ。

しかし、お水まだかなあ。

ぼんやりと、しかし微笑を絶やさぬまま、私は観察をつづけて、お水の到着を待っていた。

「姫、食が進みませぬか？」

そういうてダメ出しメモをせつせと心に書き留めていた声をかけてきたのは、ええとさつき紹介された、だれだっけ、ああ宰相閣下。

「いえ、わたくしあ酒をたしなみませんので、お水をお願いしたところなんです。お料理は本当においしいです。」

そういうて微笑み返す。

まさか油っぽすぎでおなかこっぽいともいえないし。

「ああ、姫。気がききませんで、申し訳ない。」

そういうてそばの給仕を呼びつけと、水の催促をしてくれた、いい人だ。

少なくとも王子よりは気が利くな。

そう思つてチラリとザツチヨ王子をみると、やはり自分勝手に飲み食いしてゐる。

もうここに、お前には期待しない。

「さて姫。」

あれえ、社交辞令でおしまじじゃないの？

「正直にお伺いしたい。」

やだなー。『J飯のときに真剣な話するとまあくなるじゃん。

「典礼の姫と呼ばれて名高い姫から見てこの国の作法はいかがだろ
うか？ 忌憚なく言つていただきたい」「

えー。やだー。

一番最初に思つたのはその一言だつた。

本当に忌憚なく言つたら、外交問題に発展しそうなくらいなダメ出
しできますよ。

それでもよろしいのかしら。

まあ、外交に差しさわりのない程度で嫌味を交えて、くらしかねえ。

「そうですね。

淑女の皆様方がわたくしを歓迎する意味で、わたくしの以前のドレス
デザインのものを着ていただいているのに感謝いたしますわ。
特に、王子殿下とのご婚約がなりました10歳の時のドレスなど懐
かしくまたその皆様のお優しい気持ちがうれしいですわ。

また、紳士の皆様方のお作法は、お血筋から考えますと、北方の古
の大國フェルナータの儀礼にそつているものと思つておりましたら、
お皿の並べ方などが国と似ておられる。

また、晩餐会の進行などは、どちらかといえば、わが姉の嫁いだ西
の国のようですね。

結婚式や戴冠などのような典範でおやりになるのか、お聞きしたい
ものですわ。

それによつてドレスも違つてまゝりますし。どうおやりになるので

「 じょ、早くお聞かせくださいませ？ ねえ宰相閣下。」

と答えてあげた。

問題になるほどひつつい事は言つてないよ。
ウチの典礼部なんて私の顔見ると逃げ出すのもいるよ。
そいつは長続きしねえけど
そして、一気にまくしたてのどが渴いたので潤そうと近くにあった、グラスを取りあげて飲もうとして酒精のにおいに顔をしかめた、
そうだ、まだ水ないんだっけ。ヒグラスをテーブルに戻してすこし遠ざける。

「 …姫？」

そういうつて宰相閣下が私に話しかけてくる。
気が付くと、わざわざわざわざついていた会場がシーンとしている。

「 お水はまだかしら？ わたくし、のどが渴きました。」

給仕が控えている方に声をかける。

壁際に控えていた給仕の半数が脱兎のごとく出て行つた。
一杯でいいんだけどな。

「 それで、宰相閣下。どういう段取りですか？」

「 というか、式の主役である王子殿下はまあ、軍服ですみますからいいですけど。

わたくしの場合、支度に時間がかかりますのよ。

こちらにきてからこのよつな大事をお知らせください、わたくしその場にそぐわぬ衣装で式典に出席して、恥をかかせて『典礼の姫などと呼ばれていても、あの程度だ』などと近隣諸国にいわせるおつもりで？」

そういうつて手元の扇をパチンと鳴らすときつたり四分の一だけ開く

と口元に持つていった。

そして宰相にだけ聞かせるように小声で。

「正直わたくし、塩持つて実家に帰させていただきたいですわ。わたくしが10歳の時の「ビュッタント・ドレスの「ペリー」着てるの貴方の奥方ですわよねえ。

なんかの羞恥プレイですか？ とか御幾つですか？ 奥方。」

そうして、扇を口元からはずしてにこり笑つた。

「宰相閣下？ 段取りの方はいかがですか？」

「イヤイヤ説明すると折角の晚餐がさめてしまつまじ長くなりましよ。」

後ほど詳しいものにして説明にあがひせますので、そちらにて詳しい話はお聞きください。」

本当に追いついて詰めてあげてもよかつたんだけど、さすがにそこまでしたら悪いしね。

私は手を取める」として、ぱちんと扇をたたんだ。

「楽しみにしてますわ。あと10日しかないんですけど、さすがに形式次第とか手順とかもきっちり決まっていて教えていただくだけで済むのですわよね。

当然。」

「御前、失礼いたします。」

そういうつてロマンスグレーのソフトマッチョの宰相閣下は下がつていつてしまつた。

私的にはザックチヨ王子よりも好みなだけに残念だわー。

すこし顔色悪かったようだけど、だいじょうぶかしらー。

そろそろ無理のきかないお年頃のようにお見受けしました。
好みなタイプだけに長生きしてくださいました。

「失礼いたします」

そういうつてやつと私の目の前にお水が置かれた。
それもグラス5つも。

こんなに要らないわ。
なんか違うのかしら?

「あ、ありがとうございます」

引きさがる給仕にお礼をいづ。

そしてまた3つのグラスが差し出される。

なんかこの水違うの?

それとも意地悪ですか?

並んだ8つものグラスを一つ一つ確かめながら慎重に口をつけるグラスを選ぶ。

そして一番きれいなグラスから水を飲んだ。

なんだただの水じゃん。

あの温泉宿で飲んだ水、美味しかったなあ。

そのうち運ばせるかな。

ふう、やれやれ。

まだコースは半分か。

私のお腹に入るんだろ?つか?

1-10(後書き)

最近この話を「しつかり姫とザツチヨ」と呼んでいる自分がいます
でも姫まだ15歳なんですよー！
しつかりしろザツチヨ。つてか最近名前がうろ覚えに（・ー、A；
）

1・1・1（前書き）

お久しぶりで「ざわこ」ます。

実は書きましためにいたら一時間ドラマなみのサスペンスになってしまい、

それはどうかと思ふ、やめました。

もし戻戻がありましたら、エフ、番外でじゅするかもしだせません。

さて、宰相閣下がいなくなつてしまい、お話し相手がいなくなつてしましましたわ。

となりの王子様を見れば、どんどんグラスを干してまだお料理3品目だといつのに、

ボトル3本ほんてどれだけお酒強いの？

それとも若さにまかせてガンガン飲んで、地位にかこつけて暴れても隠ペー？

どつつけにしる、この残念なマツチヨ王子は、自分の地位におぼれていふ気がして少しヤバイ気がする。

この王子で実質3代目だといひ、色々固定化した権力と不満分子が摩擦をおこしてもおかしくない。

そんな過渡期にあるようなあやつりがある。

こんなザツチヨの巻き添えで断頭台とか幽閉とか冗談じやないからねえ。

せいぜい平凡な王とかそこそこかしここ王になつていただかないといけないよね。

うん、自分の命かかっているし。

なんとか調教・・・じゃなかつたしつけ・・でもなくて。
ええと。ああ、お勉強していただきましょう。

さて、そのためにも、この残念な王子様との会話を成立させなくてはね。

「あの、王子。今お話をしてもよろしいでしょうか？」

私はにこやかに丁寧に話しかけたが、王子は傾けたグラスから口を離そうともせずにこちらを見た。
なんだか、一々態度悪いわねえ、このザツチヨ。

「なんだ。」

グラスから少し口は離したが、まだ手はグラスを握ったまま。やつぱし「イツ、作法を仕込まれてないんだ。
一人息子のボンボンだものねえ、仕方ないか。
なんかあれば逃亡で済ませてきたんだろうなあ。

「色々とお伺いしたいことがあるのですが。」

私はそれでもにこやかに淑やかに話を続けた。
非礼にも礼儀で答える、相手のレベルに落ちたら負け。
マナーの教師の厳しい格言を胸の中で言い聞かせて態度をかえなかつた。

「俺でわかることない。」

面倒くさそうに、言い放つ王子。

まったく、私はあなたの臣下ではない。

臣下だとしてもこんな態度をとる者に心から頭を下げるもんですか！

この国の文官は不幸だわねえ。

あのロマンスグレーの宰相閣下に同情した。
ウチに連れて帰らつかしらー。

「この国一番のドレスメーカーを御紹介くださいませんか？」

とりあえず、おばかな振りをして、女なら誰でも興味を持つていると思われる、

おしゃれの話題を振つてみた。

たくさんの美人さんと浮名を流していた王子の「こと、

「なんにひどい劣化ゴローしか作れないドレスメーカーよりいと
ころを知っているかもしれない。

「なんのつもりだ」

「そんなにイライラしなくて、この話には裏の意味なんかあります
んわよ。」

「戴冠式をするのなら、この国のドレスを身にまといたいのですが。
」

国民受けは大事ですもの。

民族衣装っぽいドレスを仕立てたいものです。
こちらは毛織物が盛んだといいますし、そういう生地を使って民族
衣装をベースにしたドレスをリリのアイディアで
作りたいものです。

「俺はよく知らない、侍従にでもきけ」
はあ、そうですか。

会話を続けようという気にもなりませんか。
それならば、こちらにも考えがありますわよ。
世間話が嫌なら、本題にはいろいろじゃないの。
覚悟しなさいよ、ザッショ。

「そうさせていただきます。もうひとつよろしいでしょうか？」

私は手元にあつた扇を口元に寄せる。これで唇は読めない。
丁度次のコースの配せんのタイミングで、声も拾えないほどざわつ
いている。

「なんだ、手短にな。」

またグラスを傾けやがったな。

手短にするが手加減はしない方向でいくよ。

「では手短に。

私は隣国の王女です、そなた『』ときこそのよつな無礼な口を利くのを黙つている訳には参りません。」

そうついつて、軽く扇でグラスを持つ手をはたいた。

「なにをするひ

酔いと奇襲によつて反応できず、手をはたかれた王子は、私を睨みつけた。

「何をする、は私の台詞です。

まだ、私の身分は隣国からの密です。

客に対してそんなふつきらぼうで、適当な対応をされて、不快にならない者がありましょうか？

確かに私は、殿下が見なれた美人とはほど遠いとは思いますが、少しあはれ目に私といえ、私が来た理由と向き合つてもよろしいのでありますか？」

まったく、こんな気持ちのままにふるまつ王族なんて、百害あって一利なし。

早く革命でもして転覆しちやつたほうがいいよ、ロマンスグレーが素敵な宰相閣下。

すこし、ぎやふんと言わせてやるか、

今まで誰にも厳しくされたことなさそうだなあ、この王子。

坊やなのね、こんなでっかい団体して、なきれない。

「この、無礼者つ

そついつて私の扇を持った手をすこい力で握りこんだ。

痛いなあ。アザになりそつ。

それでも私は、王子を挑発するのをやめなかつた。

この王子が自分との国をどう理解しているのか知りたかったから。

「腕をへしおりますか？殴りますか？幽閉しますか？いつそ切殺します？」

好きにすればよろしいですわ。

その代わり、一度と諸外国には相手にされないでしよう。

確かにこの国は武力もあり、今は勢いもありますから、諸外国も静観しております。

しかし、どんな力もいつかは衰えます。北の武王と異名をとられていた、国王陛下が弱られた今は、諸外国には好機。

いつでも虎視眈々と狙っている勢力が何処にでもあるでしょう？

そこで、歴史ある隣国の姫に大事があつた。

なんてことになつたら、もうどこの国もまともに交渉しようと思はず、同盟でも革命誘発でも暗殺でもして、この国をまた戦乱に戻し、あわよくば自分が霸者に」と思つでしよう。

受けたたれます？

御立派ですね。しかし実際に戦つ兵士やその家族のことを考えられますか？

王子が、身勝手な理由から隣国の可憐な姫を粗略に扱つたために戦になつたのだ。

と聞いて、兵士の士気が揚がりますでしょうか?」

「そこで私は一度話を切って、王女をこうみつけた。

震える手を隠しながらグラスを持ち上げ水をゆっくり飲み込んだ。
そうしてふんわりと微笑んで見せた。

ここが正念場。この国にはそろそろ武だけでなく分をわきまえることを知らなくてはならないのだ。

多分、国元で世界各国のマナーを仕込まれたのはそのため。
それが私がここに来た理由。

帰つてきてもいい、と父も兄も言つてくれたのは多分、私でこの国を試すため、なのだと思つ。

「私にだけではありません、これから様々な国の方が外交のために、偵察のために結婚式を見に来ます。

その時今のような態度を見られ続けるのなら、この国は長くない。弱みを見せた途端攻め込まれて内乱へと逆戻りでしょうね。

そうならないためにも、王女にはぜひとも外交マナーを身につけていただきたいのです。

戴冠式のある10日後までに。

外交の場で、知らないは通じないのです。

足もとをすくおひとする者どもからこの国を守るためです。
戦場で盾を持つよつたなものです。

嫌でも覚えていただきます。

もう王國と神國から認められて20年になろうとしているのです。いい加減、馬鹿にされていることに気がつかれませ。

この国一のドレスメーカー、どう見ても「ペリー」が得意なだけの2流以下ではありますか。

それも、たぶんわたくしが不快になるのを知った上で、我が国で昔流行ったドレスを似合わない方に着せるなんて。

それこそ、この国が成りあがりであると言つていいようなものでしょう?」「

一気にしゃべって疲れたので息継ぎのためにすこし、間をおいた。その間に、王子がまた私の手を圧迫する。

ああ、ヒビぐらい入ったかも。

「Eの……」

もう一方の手で私の肩をつかもうとする。

その手におびえるように私は大げさに身をすくませる。

上座にある私たちの席は招待客から丸見えだ。
もしこんな衆人環視のなかでの暴力などがあつたら、この国の信用は地に落ちる。

ここには各国大使の姿もあるのだから。

視線に気がついた王子は私の手首を離した。

「さあ、怒るならビビッヂ、大声で。

貴方のその図体で、私のような小柄な女を殴りますか?
いいでしょ。その時は周辺国家との全面戦争を覚悟なさいませ。
私は、それだけのものを背負つてここに参りました。

あなたの一時の怒りと平和と、どちらをおどりになりますの？」

私は、痛む手首をさすりながらもう一度、王子を睨みつけて言い切った。

ドレスに隠れた足はガタガタと震えている。

それでも、私は目に入れるのをやめなかつた。

「小娘のクセにつ！」

俺がどれだけ努力していると……」

でたよ、『僕ちゃんは努力してるんだ』アピール。
そんなもん、身についてなくては、なんの役にも立たないのだよ。坊や。

「仮にも隣国姫を小娘呼ぼうとは。私が努力していない、とも？」

それに努力なら誰でもするものでしょう？ 結果が伴わない努力など、無駄でしかありませんわ。」

私は、馬鹿にした口調で切つて捨てる。
努力なんざだれでもしてるわ。

「なんの力もない小娘如き一人や一人いなくなつたところで、外交問題などになるものか！」

おや逆切れですか、いいでしょ？

こいつは使えない、それだけの小さい器だ、と思われるだけだし。

「あら、お忘れですか？」

わたくし、いつ見ても、神王陛下の儀式にもアドバイスを求めるほどなの、

『典礼の姫』なんですよ。いなくなれば諸外国の各儀式が滞るといわれるほどなの。」

私は、とてもかつていい神王陛下を思い浮かべながら、シャンと背筋を伸ばして受けてたつた。

「それがなんだというのだ！！何の力もない女ではないか。事故が起これば人は簡単にしぬものなのだ。
そうだ、事故はいつでも起こりうる。」

そうきたか、私を暗殺するつてー。
神王さまー、キコエマスカー。

「まあ、直接的な脅しです」と。
まあ、わたくしが今事故に遭つたとすれば、もつと事態は悪くなりますわよ。」

私は今まで張り付けていた、可愛らしく微笑みを一瞬で消しちつて、扇で顔を隠した。

「なにを・・・
ぼつちゃんには、まだわかりませんかー。

「あらい。それもわかりませんかー。説明します?
では、簡単に。」

まず内政的には、王妃の座を狙つて各貴族の争いが激しくなります。もう諸外国で王女を送るつという国はないでしょからね。
下手すれば有力貴族の間で小競り合いがおきるでしょうねえ。

特に貴方の姉上様が嫁いだ先なんかは、自分の子を世継ぎと/or とかで、暗殺まで企てるかも？

外交的にはまずアルシェスとの関係悪化は避けられません。塩を禁輸にされるか、少なくとも値段は倍以上にされますわねえ。その上、いまはほどほどにこちらの友好国である、東の大國コノレアともぎくしゃくしますわ。

わたくしのすぐ上の姉が嫁いでおりまして、今まで10年以上恵まれなかつた世継ぎを姉がなしましたもの。

姉がわたくしの不幸に黙つていてる訳ありませんし。

そうそう、神国からも冷たい仕打ちをつけるでしょうねえ。

わたくし、神王さまの覚めでたき典礼の姫ですから。

この呼び名も神王陛下直々に付けてくださいたのですよ。

あ、そういうえば、殿下はまだ、神王陛下にお世通りでござりいやらないのでしたつけ？

わたくしに事故なんかあれば、一生無理でしょうね。

そのほかにも色々ありますが、お起きになります？」

わたしは指を折りながら、一々この国の傷をえぐつてみせた。

確かに武力はすごいが、所詮なりあがり、がこの国の対外的な評価だ。

金を積んで神国になんとか国家としての承認を受けたが、その加護を受けるまでは至つておらず、

出先機関でもある、杜も作られていない、中途半端な扱いを受けている。

金で名は少しばかり売るけど、実は売らないよ、っていう神国の態度が

あからさま過ぎて少し笑える。

よつやく今回の婚礼（相手がおきにいりの私だから）によつて神王の御臨席があるかも。

そつすれば、杜も作られて、やつと普通の国家になれるかも。と国民が盛り上がっているところなのだ。

私にもしここで何かあつたら、神王の御臨席どころか、国家承認も危うくなるかもなのだ。

また、この地に昔あつたフェルナータ前王家が滅びてから120年余り、この北の大地は群雄割拠で戦続きで疲弊している。よつやく訪れた統一国家による平和を簡単に崩せば、民が黙つてはいないうだろ。

戦による汚れを神王の加護で消したり、少しでも大地の恵みを取り戻さなくてはならないのだ。

そのためにも、私という存在がないと、神王の加護さえどうなるかわからないのだ。

さて、それでも私を小娘と侮るなり。実家に帰らせていただきますわ。

私は百面相をしながら私を威圧する、でかくてうつとうし王子の視線を扇でハタキ落としながら、

よつやく運ばれてきたまたも脂つこい料理に手を付け続けた。

しかし、さつぱりしたサラダが食べたい。

私は心の中でもたれる胃をさすりながら笑顔で食事を続けた。

王子は、益々グラスを傾ける。

そのこう着状態のまま、楽しいお披露目のお披露目は終わった。

手を引かれながら、入場の時よりは、ゆっくりと变成了たエスコートで退出できた。

まあ、酔っ払っているから、早足にならなかつた、つてのがせいかいなんだろうけど。

控室で、投げ捨てるように手を離された。

それに対して、冷たい視線をやるだけで済ませた。

もう、コイツには、マナーのなにも期待するもんか。

ゆっくりと綺麗な礼をとり、

「お先に下がらせていただきます。お休みなさいませ」

といふと、迎えに来た騎士の手をとり控えの間から出て行くこと成功した。

はあ、ようやく部屋で休める。

背後で扉が閉まつた時、私がそう思つたとしてもだれも責められないと思う。

でも、まだこの長い夜は終わってくれなかつたのだ。

1・1・1（後書き）

サスペンス（笑）では、ザッチョのところの「ペーパードレスメーカー」が伊豆（！？）の断崖絶壁で「こないでっ」「つてやるとこ今までプロット」という名の妄想が進みました。

1 - 12 (前書き)

「これから楽しい悪だくみの時間ですよー。」

私はウチの国から連れてきた騎士の手慣れたエスコートを受け、控えの間から退出した。

王子の心のこもらないい加減なエスコートから解放されて、ふんわりと心からの微笑みを浮かべて、我が国の近衛騎士を見上げた。

そして踵きびすを返すとそのまま部屋を出て行く。

今までのエスコートが嘘のように滑るよハヤシタヒツヨうに足羽根ヒタヒタがついてくるようにならやかに歩いて。

ああ、歩きにくかった。

どんな場合でも優雅でいられるようなレッスンは受けていても、やつぱり、歩くときにはちらを気遣つてくれる人とのほうが歩きやすいのは当たり前だし。

廊下に出た途端大げさな位肩の力を抜いて見せる。

「疲れたわ。」

母国語に戻して、ちらつちらの笑顔で近衛騎士を見上げた。

「姫、まだこちらは廊下ですが？」

すこしうつたよヒトヒトに、騎士が私をたしなめる。

「わかつていいるわ、だからアルシス語にしたじゃない。
きつとこちらの方にはわからないわよ。」

そう言つていたずらっぽく笑いかけた。

「やうですかね？」

「やうとやうよ。もうフールナタ語を使うのに疲れたわ、だから
お願ひ。」

私は騎士に甘えるように見上げた。

「わかりました、姫。」

部屋までの廊下は公共の場所だけれど、お構いなしに、私は騎士との会話を始める。

先ほどまでの王子とのこわばつた表情が嘘のよつと楽しそうになつ

くつと歩きながら会話を楽しむ。

「ねえ、リオット。今日の晚餐はどうだった？

貴方にもせひんと」飯は出たのかしら？

最初から最後まで脂っこい料理を思い出しながら、私は騎士を名前で呼んで一層親しげに話した。

「我が姫。わたくしにまでお心を碎いていただけるとほ、なとお
優しい。」

いつも魚メインだし。
やつぱりせんべらかすけれど、リオットは、あまり脂っぽい料理
は得意でないはず。

いつも魚メインだし。

「で、口にはあったのかしら？」

私にはすこし脂が強すぎて、量があまりたわ。お酒となら一度いいのでしようね。」

思い出しながら、もうこつた。

たしか2～30年前位の宮廷料理の流行が、今日のようなこつてつ、もつさり系だつた気がする。

味付けも、その頃のままだし、きっと2～30年前にどこの宮廷で出されて、それが宮廷料理として定着したまま。

といふことなのだろう。

こんな料理、もし神王さまがいらしたときにも出したり、神王さま、そのまま帰っちゃうわ。

だって、神王さまの最近のお気に入りは「絶海の孤島風」ですもの。

あ、でも今日の料理に、絶海の孤島の神秘の調味液、ソイソーをかけたら少しさつぱりするかも。

パンズーとかだともつとおいしくかな？でも酸っぱいからどうだろう？

「そうですね、わたくし自身は肉より魚を好みますし、ソースが单调ですこし飽きました。

警備中ですから、酒で流しこめませんし。」

そう言ってエリオットはすこし表情を曇らせた。

料理の多彩さは、やつぱり実家のほうが断然あるし、王家ではそのうちでもかなりな種類の料理を宮廷料理に取り入れている。神王様もウチの料理が気に入つてたなあ。

今度来る時は「コナモン持つてこい」とか言つてたわね。

「そりゃ。お互ひ大変な思いをしたわね。」

私も給仕に、『ソイソーを。』とか言いそつになつたわよ。」

そう言つて微笑みかける。

「確かにソイソーのはじくなる味付けでしたね。わたくし的には、メイタイのソースも捨てがたく。」

メイタといふ赤い実からできる、酸っぱくも甘いソースも最近「絶海の孤島」から伝わってきた調味液だ。

お子様から老人まで、今のアルシェスのトレンドは、メイタイソースの料理である。

卵から野菜までなんでもイケると評判である。

「そうね、クステーソースでもいいと思わない?」

クステーソースとは色々な野菜ぐずと香辛料を煮込んだソースである。

その色が茶色いため、最初は敬遠されていたが、コナモンとの相性がいいため、人気が上がつてゐる。

これも絶海の孤島からの輸入品だ。

「クステーは思いつきませんでした。さすが姫。」

そう言つて、エリオットはすこしその味を想像してほほを緩ませた。

そういえば、エリオットは玉焼きクステー派だつけ。

私はソイソー派なんだけど。

「もう言えば、姫？」

なにか思いついたよ、エリオットが立ち止まる。

「なにかしら？」

エリオットが意味のない行動をすること自体珍しい。なにがあつたんだろうか？

「すっかり言い忘れておつましたが、今日のお召し物、本当にお似合いです。

春の女神のようです。ですが・・・少し袖口が。」

メモ用紙を一杯取り出したからなあ。袖。すこしほつれたかなあ？

「ありがとうございます、エリオット。」

痛んだ袖口をエリオットが腰のサッシュを外して隠してくれた。そこまで痛んでないのに。やさしいな。だから私はエリオットが大好き。

「いえ、姫のためのわたくしですので。礼など。お部屋の中までエスコートさせていただいても？」

そつか、もうお部屋か。

うまいなあ、エリオット。いつも色々な演技を忘れて楽しんでいたのに、ちゃんと打ち合わせ通りだわ。

「もちろん、少し話し相手になつて頂戴。

このサッシュも返さなくてはいけませんし。」

そこで言葉を切つて、扇をゆっくり広げてわざと小声にした。

「リリの王女様は、話題も少なくて、しゃべり足りないの。」

そつと扇を閉じると、エスコートのために預けた手に力を込めた。

「では、お付き合いいたしましょ」

エリオットは、その手の上に自らの手を重ねて、私をリードする。

私たちは、そうして割り振られた部屋の中に消えていく。

もちろん、今までの会話は、周囲の者に聞かせるようにしているのだ。

エリオットと怪しい関係、なんてありえないからー。

我まだ15歳ですし。

その上、エリオットって呼び捨ててますけど。このある意味胡散臭いまで理想の騎士様は、わたしの小兄様ですし。

身分を隠してこの城に潜入中です。

エリオットってのは、小兄様と同じ年の従兄の名前でして。

近衛に配属されていいのですが、ぱっと見よく似ています。

中身は、小兄様とは違つて朗らか系の癒しの騎士様です。

あ、兄様が癒されないって訳ではありませんよ。

小兄様は、頭脳系たくらみ系です。

これから私の部屋で、いちやいちやしているよつと見せかけた作戦会議ですわよ。

本当は、客用富殿に長居してはいけない騎士が、私の部屋にいてもおかしくない状況を作らなくちゃいけないのだもの。子供騙しでも、少しあ芝居をしなくちゃね。

私は部屋に帰つてもやさぬのか。

今頃あの酔つ払い王子は、寝台でぐつすりなかしき。

せこせこ連絡でもみてうながさんといふことを思ひます。本当に。

1・12（後書き）

「絶海の孤島」 調味料メモ

ソイソー＝しょうゆ

バンズー＝ぽんず

メイタイ＝トマトケチャップ

クステーソース＝ウスターーソース

絶海の孤島はなにやら神祕の香り。

実は・・・・

という話はまた次で。

1 - 1-3 (前書き)

ええと、まだ一田田が続きます。
すいません、あと1～2話でよつやく姫も寝られそうです。

2個の悪だくみが同時進行です。

1・13

「ヒロオット！」少し待つてね。着替えてくるから」

私はやうこいつと、応接室にヒロオットを残したまま、隔壁に一旦引いた。

「お急ぎにならなくつても結構ですよ。調度品でも眺めますから。」

やつぱり、おどけるヒロオットに少しだけ笑いかえした。

パタン。

私の後ろでドアが閉まる。

私は詰めていた息を吐いた。

「お疲れですか？」

ドレスを外すために近づいてきた、アンナとレンが心配やつこやういった。

「すこし。ね。」

そう言つている間にも一人の腕は休みなく動き、どんどん私からドレスを外して行く。

「あ、そのドレス管理はしつかりね。どうせひがは、トザイン

泥棒がいるみたいなの。」

ドレスを脱がされながら、今日の晚餐会の惨状を思い出して身震いしながら言った。

「どういふことですか？」

私の様子が変なのに気がついたのか、エレンが声をかけてきた。
「ああ、今話すわね。その前にリリコを呼んでもらつても大丈夫かしら？」

コルセットからようやく解放され、ほっとして、息を吸い込む。
その吸い込んだ空氣をため息にしてしまいながら、エレンに頼んだ。
こゝまではずしてしまえば、あとはアンナ一人でも外せるし。

「今呼んでまいりますわ。御前、失礼いたします。」

エレンはそう言って、外したドレスを衣装カートに丁寧に入れると、
礼をとつて出て行つた。

「で、どうでした？ 王子様は。」

一人だけになつたとたん、アンナが好奇心旺盛にきいてきた。

「どうもこうも。残念なマツチョなのよー。アンナああ・・・」

アンダードレス一つになつた私はアンナに抱きついた。

不安だつた、怖かつた、完全アウエイでだれもが私を侮つていた。
ついつかり涙が出そうになつてアンナの服に顔をうずめた。

「大変でしたね。でも大丈夫ですよ。みんなで姫さまを支えますからね。

いざとなつたら、『実家に帰させていただきます』で行きましょう。

「ござりなれば、神王陛下が恐れ多くもいらっしゃるやうですか
ら。」

喉の奥でアンナが笑う。

「そういえば、嫁に行くと神王様に言つたとき、そんなこと言つて下さったわねえ。」

「冗談の好きな方ですからねえ」

「本当に

二人でクスクスと笑うと、色々な緊張がほどけて行く。

「さて、サパーをきて下さいな、姫

「コルセットなしでね」

「もううん。

」

ドアがノックされた。

「誰ですか?」アンナの声が厳しくなった。

「お呼びこより、リコロさんをお連れしました
Hレンの声がする。

「姫様、どうします?」

緩めに仕立てられたサパードレスを私に着つけながら、アンナが聞

していく。

「着替え終わつたら、エリオットと一緒にいつぺんに説明するから。応接室で待つて。と」

みんなに聞いてほしことがそれぞれる。

だったらすべてをいつぺんに話してしまつた方が、状況もわかりやすいだらう。

アンナが頷く。

そして、少し声を張つて、外に聞こえるよつに言つた。

「姫様の着替えが終わつたら応接室でお会いになられます。少し待つよつに。あとお茶の支度を」

そう言つて、私に微笑みかける。

ディナーが脂っぽくて口の中がまだベタベタする気がする。お茶でいいからぱりぱりしたい、そんな気分をわかつてくれたようだ。

「はい。ではそのよつに」

ドアのそとで、レンが返事をして、離れて行く気配がある。

「さあ、こつも通り可憐らしくですよ、姫様。」

私が着替えるとこつもアンナがかけてくれるこの一言。この一言で私は顔をあげて歩いていける。

* * *

私、エリオット、アンナ、レン、リコ。」

応接室で、私が晩餐会の間書き留めていたメモをティーセットの隙間一杯に広げている。

「これ、本当ですか?」

リリコが、怒りに震えながら私のメモを握り締める。

そのメモには晩餐会の出席者のドレスが、王家専属になつたリリコのドレスそつくりに仕立てられていたことが書いてある。

「ええ、本当よ、きっとアイツがこの国に入り込んだとみて間違いないでしょうね。」

縫い目の特徴といい、厭味つたらしこそ安っぽく仕立ててくれるところと言い、絶対アレよ」

リリコは、アルシヨスに来てから色々ひどい目に遭つて、現在の地位に昇りつめたのだ。

そのひどい目のほとんどが、アレのせいである。

本當は名前も聞きたくもないだろ。せつかくリリコも立ち直つてきたところだけに、リリコの表情が暗くなつていく。

「あ、あたしがあのとき騙されたりしたから、いつまでも王家の皆さんには迷惑を」

リリコがうなだれたまま、指をかむ。

リリコは相手を責めるより自分をじんじん責めてしまう性格なので、そうならないためにも今回あちこちカタをつけらるべきだと思つ。

「仕方ないわ、貴女はこちらに来たばかりで何も知らなかつたんだから。」

それでも、結果的にはアレのおかげで、私は専属のデザイナーを手に入れることができたんだから、よかつたと思つてゐるわ」

私ははげますように、リリコの手を握る。

絶海の孤島からの来訪者を拾つたモノは、國に報告する」とになつた

ている。

それをわざとしなかつたうえ、リリコの不安を利用しつくしたアイツがこの国いる。

ならば、保護者である私が、今度こそ守つてやる。

「こちらに来てくれたのがリリコで本当によかつた。だから、こんどこそ、アイツをどうにかして抹殺する必要があるのよ。リリコのためにも今度こそ決着をつけなくてはね。」

そう決意を込めて言葉になると、もやもやしたものがすつきりと落ち着いてきた。

リリコの皿にも少し霸氣がもどる。

それを見て安心した私は、ずっと黙り込んだ小兄様を見る。小兄様は私が広げたメモを見ながら、どんどん眉間にしわを寄せて行く。

「そうだね、やつちやおつか。

武でも実力があることをこちらに示しておかないと、いつまでもなめられる訳にはいかないしね。

結婚式に戴冠式だと？一言も相談なくよくもなめた真似してくれたよ」

兄様、その微笑み怖いです。

この国はまだ大国の自覚がない。

自覚を持たせるためにもここでしつけておかないと、近隣の迷惑になるバカ犬になってしまつ。

「小・・エリオット。やつてしまいましょうね。」

ふう、こんな壁に何が入つてゐるかわからない城内で、エリオットの正体をばらしたら大変だわ。

「決まりだな」

口を滑らしかけた私をちらりと睨むと、エリオットは、お茶を口に運んだ。

集まつたメンツはその言葉に重々しく頷いた。

「さて、戴冠式だけど、アーシュ姫。どうするつもりだい？」

小兄様つてばそれを私にきますか？

まあ、この国のこんな状況じゃ、私に聞くしかありませんしね。

「そうね、まだこの国は様式が決まっていないようだし、私にやりやすいように少し手をいれるつもりだけど、基本的には古のフェルナータの様式を使って行けばいいと思っています。
神王杜のほうでもフェルナータの王族傍系の末、ということでの此方タングジールを国家承認したようだし。」

フェルナータとは長く友好関係を結んでいたので、アルシェス実家には歴代の戴冠式の絵巻まで残つている。

頭を下げても見たいのではないだろうか？

「ふん。よくやる手ではあるナゾな。」

小兄様、口が悪すぎます。

「フェルナータの形式をついでやらないと、血統を証明するためにも諸外国に示しがつかないし。」

こちちは傍系を名乗るんだから、それはわかっているだろ？

「でも、じつらこな、長引く戦乱のせいでろくに資料もない、と兄様、身も蓋もありません・・・。
もう少しソント言つてください。」

「そうみたい、晩餐もあらひの様式のつきめぎで、みつともないことこの上なかつたし。」

しかし、あんな晩餐会やらかしといて、フェルナータ旧王家を標榜するとはねえ。

知らないって怖いわ。

フェルナータの晩餐会と言えば近隣に鳴り響く美食の宴だったのに。あの油漬けだらけの「飯をだし」といて、それをいうかー。知らないって怖いわ。

「10日で、しつけ治せるか?」

そいつ言ってからになつたティーカップを小兄様は指で持て遊ぶ。

「無理ね。まあ、がんばればまね」と位にはできるかも。でも、今のままじゃ言つこと聞いて下さらないでしょ?うね。」

そう言ってため息をつく。

だって、次の王様があの「朴念仁」を具現化したようなザツチョだからね。

マナーの必要性を感じないでしょうねえ。

「まあ、まね」ことができれば今回はそれでいいか。」

小兄様はそう言つて、ため息をつく。

「私としては、本当に嫌なんだけど。仕方ないわよね。でも、ね。少し時間を稼ごうと思つの。」

そこまで私が言つたところで、小兄様の纏う空気が変わる、小兄様の拳が机をコツコツと2度かるくたたいた。

聞かれてる、という合図。

私はそのあと簡単に、晩餐の間に考え付いた時間稼ぎの方法を声に

田代さんにメモにしてみんなに告げた。

その間私は書いていることとはあるで違う事を口にしていた。それは、聞かれてもいいこと、とこうよりゼひーあら様に聞いてほしいことだった。

「あの、デザイൻ盗人を絶対に捕まえてやりますわ」

そうこうと、どのようにしてアイツを追い詰めていかをちょっととドラマチックに語つて見せた。

「…………姫様…………」

すべてを筆談で告げ終わつたあと、アンナは呆れたように私を見つめた。

「アーシュ・姫・それはやりすぎじゃないのか？」

小兄様は天井を仰ぐ。

「それは、こちらの王子様が怒りませんか？」
リリコはそう言つて立ち上がつた。

「ここのやらないと、ザツチヨが氣がつかないと思つ。私はそう言つてこり笑つた。

「で、エリオット。この国は杜がないから、陣もないのよね？」
陣とは、陣同志ですぐさま手紙や小さな荷物ぐらいなら輸送できる便利なモノで、神王様の管理下に置かれている輸送手段だ。
それが置かれているのは国の中心部であることが多い。

一般人でもお金さえ払えば利用できるので、一般の人は杜とは輸送屋くらいの認識であるが、それは杜の機能のほんの一部にすぎない。

杜設置の目的は神王様の耳目の役目である、ってなってるしねえ。

「まずは、実家にお手紙書かないとね。何時つくかしら？
杜がないなんて、やっぱり成りあがり国家はこまるわ。
あ、結婚したら私用の陣だけでも神王様にお願いしてつくつてもら
いましょう。」

晴れやかに笑つた私の手は先ほどまで書いていた本当の悪だくみの
計画を口ウソクの炎の中に隠した。

「それがようござります、姫様。」

今まで控えていたアンナがそう言って不敵に笑つた。
アンナが静かに怒つてて、怖い。

こうして、私達による、しつけのわるい大型犬のしつけ計画が静か
にスタートしたのだった。

1・1・3（後書き）

神王様についてはおいおい説明します。
絶海の孤島は文化も文明も違う場所です。
来ることはできても行くことは難しい。
そんな場所です。

登場人物が増えってきたので、
そろそろ人物紹介のページを作ったほうがいいですか？
サパーードレス＝夜に自室で着るゆつたり目で装飾も少なめの普段着
で簡単なドレス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0441u/>

或る政略結婚の実体

2011年11月27日21時46分発行